川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十九年八月二十五日 印刷
昭和四十九年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五六八号

No. 568

句集・川柳塔について

九月号

タッチでえらべば
やっぱりサコム

サンヨー電子式計算機
サコム
SACOM

見やすい設計　ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

HORAI

551
蓬莱商品の目印

アイスキャンデー
あずき・パイン・ミルク・チョコ
ソフトクリーム
バニラ　・　ミックス　・　チョコ

蓬莱
大　阪・なんば

《出張販売》高島屋　そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

炎熱にさかろうて老骨汗拭う

老骨に日課の汗の爽やかさ

義姉入院

家庭医学の知識で院長とわたりあい

それ見なはれ癌でなかった祝酒

葬儀屋をがっかりさせてご全快

中島生々庵

かんめい

去る7月9日国家指定芸能特別鑑賞会が京都南座で催された。関西では17年振りだという。重要無形文化財保持者として国から認定された37名のうち、27名という多数の人達が一堂に会し各分野の最高峰の妍を競う機会は、私のような者にとっては特に千載一遇とも謂うべく有難い感銘であった。

丁度二日前の路郎忌に「川柳塔」10周年記念同人句集発刊川柳大会を持ったばかりで、その亢奮の余韻消え難い私であったのと、芸術のために生涯たゆむ事なく、従って私などとは遙かに高い鑑賞眼を持って居られた路郎先生に、この時代の流れと、独自の苦境の中に磨きあげられた伝統芸能の極致を一目お見せ申したらと思った。殊に先生より高年の鶴沢寛治が、三味線を生き甲斐として元気であったりするのを見るにつけて胸がつまるのであった。又私とは同年の清元志寿太夫が、見事に健康をとりもどした活躍ぶりも忘れ得ない印象深いものであった。

座右の句

牛の瞳に人間何をあわてとる　（栞）

私の句

水飲めば水の味するすばらしさ

板尾岳人

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

かんめい……中島生々庵…（1）
白楽天の詩作に思う……若本多久志…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（三）……（22）
清鈴木博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（30）
シベリアお菊……東野大八…（24）
同人句集『川柳塔』……（38）
田中好啓・北川春巣・浜田久米雄・山内静水・尼緑之助
藤井明朗・伊藤茶仏・河村日満・定金冬二（到着順）
秀句鑑賞…（同人吟）……浜田久米雄…（36）
…（水煙抄）……正本水客…（37）
百人一首と川柳…（3）……冨士野鞍馬…（46）

白楽天の詩作に思う

若本多久志

細雪、少将滋幹の母、など数々の名作を遺し、稀代の名文家と言われた谷崎潤一郎氏は、その著「文章読本」の中で八現今では猫も杓子も、智識階級ぶった、ものの言い方をしたり、文章でもやさしい言葉で済むところを、わざとむずかしくもって廻る悪い傾向が多くなって来た。昔、唐の大詩人、白楽天は自分の作った詩を発表する前に、必ずその草稿を、無学に近いお爺さんやお婆さんに読んで聞かせ、彼等にわからない言葉があると、躊躇なく平易な言葉に置き換えたという、有名な逸話がある。

我々は常に、この白楽天の心がけを忘れることなく、自分の学問や智識や、頭脳の働きを、見せびらかそうとしたり、未だ前人の言わない用語を作ってみようとしたり、自分だけ偉がろうとする癖や、根生を改めなければならないと述べておられる。

そこで今、柳壇では「わかる句」「わからない句」の論義が盛んに行われているが、そのいずれの主張にも、主体的な根拠が薄く、両者の作品を鑑賞させて貰っても、自己の主

川柳と阿部次郎氏……石崎柳石…(26)
近作……諸家…(21)
一分間の柳論……島居百酒…(58)
きのう・きょう……本多柳志…(28)
柳神を目指して……直原七面山…(45)
雅号ぶっちゃけばなし……越智一水…(59)
山本素郎…(63)
初歩教室……本田恵二朗…(50)
大萬川柳「あなた」……川村好郎選…(52)
柳界展望……(54)
本社八月句会……(庸佑)…(56)
各地柳壇(佳句地10選)……大矢十郎…(61)
一路集「地震」……木村弥栄子選…(48)
「雷」……蔵本白梅子選…(48)
「火事」……月原宵明選…(49)
編集後記……(一三夫・葉子)…(64)

座右の句

てっぺんが見える鏡で気に入らず　(生々庵)

私の句

ベレー帽被って鏡見なおす気

原田明春

張と裏腹な傾向を見せている不徹底さが、目立つのはどうしたことであろうか。

先ず後者について一例を挙げれば、自らも革新作家と任ずる川柳家であるのに、句会等の兼席題で詠んでおられる句は、ほとんどが「わかる句」を主張される作家の句と変っていない点である。

又、前者については、その雑詠に於て四、五句の中に必ず「試み的」というような「わからない句」を混えておられる点である。

茲に於て思うことは、明治中期の頃、狂句猥句の泥沼から、真の川柳を救い上げようと、革新川柳の旗印のもとに、当時では「わからない川柳」と言われた現代川柳と取組み、庶民にもわからせる運動(批判はあるにせよ)に徹した井上剣花坊、阪井久良伎、川上三太郎、麻生路郎、岸本水府の各先生や、その他、諸先輩の実行力には、頭が下るのである。

しかも、この運動の根底には、文芸作品のあらゆるジャンルに共通する「共感性」ということを尊重されていたことである。

今、革新川柳家と自称する人々に、前記、谷崎先生の述べておられるような、衒いがあるとは思わないが、いずれを主張される作家も、白楽天の詩作態度を、もう一度考えてみようではないかと、反論をも期待し、敢えて一文を草した次第である。

詩の国に生れてどれが詩だと問う

(井上剣花坊)

川柳塔

貝塚市　野坂つき子

動揺をかくす笑顔がピエロめき
凡人の気楽さ笑う瞳と出会う
義理で逢う靴ゆっくりと歩いてく
亀裂したふたりへ哀れ夫婦ばし
鈍感な夫で或る日救われる

富田林市　板尾岳人

雪渓の下は真冬と云う真夏
渓下る男へ道をあける蛇
山男涼しい汗を峰に捨て
山男滝の力を背で受ける
蟻の汗山の男も負けていず

神戸市　小浜牧人

湧き上る雲へ闘う夏の詩
生きてゆく蟻に日向も蔭もなし
中年の焦りへ赤信号がつき
ちょぼちょぼの出世で奇遇乾杯す
遠い記憶に母の糸繰り唄がある

中島生々庵選

出雲市　尼　緑之助

高松塚古墳

何を見に来たのか落書置いて行く

石舞台（二句）

謎かけて石むろ主張してやまず
権力の残骸どぎもを抜く巨岩

甘樫の丘にて

人類の足音甘樫の丘で聞く
万葉の里参院戦前夜

青森市　工藤甲吉

参議院からふるさとの歌まつり
アンケートにもはっきりとヘソ曲がり
同じ血が流れて同じ道たどる
しみじみと蚊帳の広さに亡妻思う
くちびるをきれいに亡妻は夢に出る

諫早市　原田明春

風のない風鈴団扇で鳴らして見

囲われ者のように朝顔鉢で咲き
魚屋の紙幣はうろこつけたまま
大船に乗った気女房の大鼾
帰っても役所が続いている社宅

大阪市　吉田圭井堂

公約とやらで辺地の近代橋
わが庵は1DKで陽の目見ず
ゆるぎなき地盤に胡座かいて落選
師の影は踏まぬどころか叩き出し
インフレに真瓜メロンの値で売られ

倉敷市　本田恵二朗

行方不明になった日本のこころよ
恍惚のうしろ姿に罪が無い
切札が無いから妥協の顔作る
見栄坊が胸を張るから漫画めく
朝の無い女ボソボソボソと食い

香川県　三井酔夢

台湾行

ジェットから不思議な雲のファンタジー
なつかしい漢字大意はほぼ当り

忠烈司

炎天下微動だにせぬ兵若し

基　隆

残照と魚臭と船で来るもよし

故宮博物館

ため息を重ね日参したいとこ

岡山県　浜田久米雄

総入れ歯恥外聞もなくはずし
続きかと思えばコマーシャルの顔
だるまに目入れて男にしてもらい
道問えば解せぬ方言返って来
独酌は燗にも人の手を借りず

大阪市　本間満津子

忘れたいことは枕に吸いとらせ
涙とは別に胃袋生きて居り
ガラスごし解説つきで孫に会い
昼食をケチってパチンコで負けてくる
平凡な日々ありがたいとも空しとも

松江市　小林孤呂二

有頂天やたら名刺出したがり
性にあう細く長くで酔うている
いじらしい助っ人の役父が買う
どうかしてる人類亡びる本漁る
淋しがらすな通信票も見せず

宇部市　平田実男

養老院また家柄の自慢をし
左遷の荷まとめる背中が泣いている
あげ足を取るライバルでたかが知れ
台所改造妻も若返り
盆栽のようにはいかぬ子の躾

恋をしているリボンか花しょうぶ
いつの日か炎となる火うずめおく
父の日の父に耕す土がある
バカになることのできぬもばかのうち
芋の葉に滴手もなく丸められ

島根県　小砂白汀

赤い服着ても皺までかくせない
好きなものないのに召し上がれ召しあがれ
水を得た魚思わす退社時
妻不在玉子もろくによう割らず
早耳のひとり合点に踊らされ

宝塚市　傍島静馬

H君逝く一句

友ひとり逝く淋しさにいる仏間
被害者のどんな示談か家も建て
師とおなじ道十戒を背負いゆく
蠅なんか生きてんでもとおもう床
弟子連れて恩師旅好き旅にいる

鳥取市　河村日満

泣き寝入りそんな平和な鼾聞く
静けさは葺の穂先にゆれる風
うなずいた重さ言いつくされている
つぎ直す素直な妻のお茶に負け
淡彩のいのちを筆は呼吸する

倉敷市　水粉千翁

ほほえんでだまって見るも愛のうち
そっとしてほしい日もあり横に寝る
ワンマンの孤独を突ッつく足の裏
フィルターを通せばご意見気障に見え
労りを寂しく怒るうれしさよ

和歌山市　野村太茂津

奥三河

天竜下れば櫓の音だけにある旅情
緑りの底に沈んで水の音の宿
サクランボへ来るヒヨドリに手がとどく
見上げれば見下せば　ただ石段の鳳来寺
仏法僧と聞けば聞こえる旅ごころ

大阪市　正本水客

片手にて靖国神社の鈴鳴らす
仏心を必死にさぐる滝の音
かき氷親子の時計三時指す
婆さんの手酌遺影は年とらぬ
血判を押す少年を嗤えるか

八尾市　香川酔々

新築の校舎母校の味がせず
生きているあかしの怒号とは淋し
五線紙にバラの花ビラ夢にみて

伊豆方面の旅

十国へ流す放尿バス降りる

鳥取県　鈴木村諷子

古びたるお吉の三味の語りぐさ

富田林市　岩田美代

朝顔がこんなとこまで縋ってる
夕やけよきれいな嘘はもうたくさん
何かある雲の走りを見ていたり
カッコ良い台詞が言えて悔しきり
こんな時の私が嫌いで顔洗う

堺市　高橋千万子

亡父三回忌一句

灯明へ孫孫孫の話する
切りつめて父の日母はおしげなく
シャボン玉夢をたくしてふいてみよ
無理をしてよろこばれ又無理をする
金魚死ぬそれでなくても淋しい日

神戸市　仲どんたく

中小企業ですねん土曜出勤す
ツイカンバンヘルニヤ　ゴルフの時は別

南禅寺

五右衛門の位置でカメラの人となり

京にて（一句）

万緑に蓮のみ白し梅雨の音
佐渡の灯が消ゆるごとくに勝太郎

西宮市　島居百酒

限界を知っても野心まだもたげ
茶柱が気になる夢を消してくれ
餌を盗む雀へおっとり籠の鳥
お袋の味の暖簾で飲み過ごし
頑固さのドラマ親父を見て笑い

尼崎市　黒川紫香

盆近し亡妻（つま）もあの世で老けたろな
旅立ちも一人いつもの服で行き
あじさいのぬれて地蔵に寄りかかり

天竜沿いに

天竜のしぶきに桑の実揺るる

合歓（ねむ）の郷

若者とサイクリングするも合歓（ねむ）

高槻市　若柳潮花

晩婚を初婚なぞと噂され
花道のせりは奈落へつづく道
浴衣着てネオンが作る影を踏み
ふるさとの庭は秋待つくるみの実
あじさいへ並びシャッターを頼みに来

大阪市　本多柳志

賞罰のない履歴書を書きつづけ
移り行く世相にうとい広辞苑
安っぽい拍手が芸を粗くさせ
十円の嘘がとまどう電話口
いい国にするポスターへ立ちどまり

豊中市　戸田古方

兄弟は木の芽の伸びを話し合い

わたくしを見兼ねておいでる親いまし
ど無精ここまで本人さえあきれ
ドライな音たてて石ころ移動する
派手なまま調和さしてる若返り

島根県　錦織文子

消えそな夢へまぶたを又閉じて
ぜいたくな暮しかも　庭に螢飛ぶ
里返り対話の夏の柔かさ
老二人三寒四温も四季もあり
ときつける櫛は鼓動を見のがさず

倉敷市　稲田豊作

髪を梳く娘に亡妻の影を見る
大夕立水車のテンポ踊りだす
小賢しい饒舌恋が遠去かる
所詮もう銭にならない老の汗

入院して

残照もなくて私の陽が沈む

松江市　岡崎祥月

大和路にて

霊験あらたか壺阪登る老い二人
大和三山さすが歴史の都なり

路郎忌川柳塔社十周年記念

同行八名遺影の前にひざまずく

白浜温泉にて

三十年の垢　白浜の湯に浸る

千畳敷にて

畳千畳敷ける広さに夫婦寝る

出雲市　原独仙

山肌をえぐられてても山黙し
もうガタが来てる老骨鞭うてず

（川柳塔十周年大会）

好郎を師の面影に似せて聴く

明日香村

ひもとけば矢張り歴史にもある男女

帰郷

帰途ひとり同人句集が慰める

岸和田市　高橋操子

丸うてもやはりひとかどほしい人
割り切れぬ心古しと思えども
こんな虫にも保護色（ホゴシヨク）があり世をおもう
心澄むダイヤカラットにこだわらず
旅の孫電話くるのは夜かしら

大阪市　小出智子

ゆかた着て古い女の殻をもつ

別れし母に

母病むと聞けば泪が先に立ち
不幸もう背負いきれない母の齢
記憶の中の母は何時でも泣いていた
許そうと決めて久しい母の名を

大阪市　河野君子

観心寺から延命寺へ山越えて（二句）

山のしずくに潤う女　業を秘め
合歓の花ふと口ずさむは子守唄
山の音しずかに煩悩沈めたり
子の決意へ母も平行線たどる
昂ぶりの後の姿勢が崩れてる

大阪市　柳原静香

セットした髪を按摩は容赦なし
現実に還ればやっぱり聴えぬ身
朝詣り泣けぬ女の業深し
柳行李どん底時代の唄がある
いっぱしの顔して買うてる山頭火

堺市　山本素郎

景品のプラスチックも持って嫁く
毒喰わば皿まで赧ら顔が喰う
かまきりの寄らば斬るぞを抓みあげ
裸には馴れてるくせにキャーッという
スランプの詩人パチンコ屋をのぞく

大阪市　山川阿茶

因果応報植物人間で生きている
死は結構病気は嫌です仏様
毒舌を可愛いきれいな声ではき
サングラスパンダのような顔になり
寿々と書きプレゼントする金の鈴

東大阪市　久米奈良子

毎日展、関西展へ出品

入選へ文房四宝拝むなり
宿縁のいくつか認め別れ行く
娘をしばる絆としらぬ母の愛
子の手紙教えた筈の文字がなし
恋人と父がだぶった夢の貌

大阪市　金井文秋

腹立ちが触れてはならぬとこに触れ
恐いもの知らぬ意欲にかぶと脱ぐ
気が付いたらしい掃除機止めて立ち
付かず離れず器用なまねの出来ぬ人
ひたむきな気性を他人に利用され

大阪市　宮尾あいき

雨続き人恋しさに書くたより
三日目の雨は雀も悲しげに
泣きに来た故郷今宵夏祭り
背伸したまま風鈴の子守唄
亡夫に似て末っ子寝おきの悪いくせ

堺市　河内天笑

兎と亀スポーツカーは兎かな
喫茶店のマッチばっかりふえて夏
朝のトイレで今日はええことありそうな
スクラップ勿体なくも荷から洩れ
ホームラン打たれた方へ口をあけ

大阪市　大坂形水

思惑損までも政治のせいにする
暴力団一枚かんでる倒産社

キャディ、Nさん

有名なプロに助言もしたキャディ
キャディから見た大臣の腕のほど
ペナルティを見て見ぬふりもするキャディ

大阪市　不二田一三夫

陶工の指が左官の指に似て
作家の妻　いつも背中へ話しかけ
作家志望へわが家の貧を見てもらい

寄　席

花菱アチャコ師の辞世？〝負けはせぬ夢は舞台で
見得をきり〟（49・7・25直腸ガン）

七〇キロで笑わせ四〇キロで泣かせ
ケチ哲学はたらいたらゼニ貯まりまへん

倉敷市　小　幡　里　風

かかる世へせめて丸い石を積む
負けて勝つほんとに負けた顔をする
御希望に添い兼ねますと但し書
竹割ったような気性へ敵が出来

門真市　福　島　鉄　児

弓削にゴルフ場建設（一句）
この辺でゴルフが出来る土地ブーム
同情をすればいつまでつづく愚痴
本命は追伸にある子の便り

取急ぎなどと勝手なことばかり

岡山県　直　原　七　面　山

白い歯をくぐって転り出る愛語
遺言をテープに取らせて悲しませ
傷心の涙も涸れて秋の月
飲めるから飲んで汚職の罠に落ち

高槻市　福　田　丁　路

極楽も地獄も信じ自我を捨て
何流か知らねど苦い茶を出され
感情を殺し仰せご尤も
うたい文句に文化住宅

名古屋市　吉　田　水　車

路郎忌

「旅人」を誦す窓辺に雲早し
参院選終わる（一句）

七夕の笹のあわれは模造品
養殖のカニはなかなか泡を吹き

祇園祭

コンチキチン浴衣が着にくうて着にくうて

島根県　藤　井　明　朗

独酌になって次の手を考える
神の鈴を鳴らして善男善女
距離おいてさめるまで待つ別居

川柳塔社大会に出席

一年振り会うてもあわただし別れ

大阪市　江城修史

断絶の谷間に鳴らす母の鈴
絢爛と生きた人生愛に飢え
つきささる一語を吐いて子が叛く
久し振り逢えば互に探り合い

大阪市　天正千梢

ええ法話やったと帰りにもう忘れ
いいかげんの貧しさ神からいただいて
納得さすには文章貧しすぎ
窓開けて百合の香をおすそわけ

今治市　越智一水

降る時に降らぬ六月風白し
その人の心を歩巾からつかみ
ロッカーの数字にもある好き嫌い
狂乱物価だ妻よお前もデモに出よ

富田林市　和田維久子

西大寺、秋篠寺一句（六月廿七日）

萩の色緑に映えて秋篠寺
その孤独ふと饒舌のうらで知り
より添うて見たし師のかげ踏むあたり
倖　不倖　それは魔法のことばかも

京都市　松川杜的

湖西線（七月二十日開通）試乗

ここからが始めての線胸躍る
バラストの白　湖西の陽をはじき
琵琶湖大橋見えて車窓立ち上り
借景鉄道なるほど琵琶湖比良比叡

米子市　八木千代

流れ雲悔いのひとつが割り切れる
涼み台ポツリと苦悩子が洩す
瀬をすぎて流れにも唄よみがえる
不信まだ残す女の唇の線

倉吉市　奥谷弘朗

下積を何んとかなるさの気で続け
定年がきたのに劣等感つのり
おなじことなら笑って生きることにする
石なげて波紋みつめている孤独

松江市　中川晃男

春の海のたりのたりと汚染され
整理したこんな所に文化財
コップ酒　黙って男の腹に沁み
わが姓名恥ずかしながら連呼する

伊丹市　小川静観堂

生き方はいろいろあったがもう枯野
お盆のお客に亡妻も居ようとはうそみたい
湯どうふを亡父に供えて芋焼酎
勲章一個佩用で盃持ちまわり

倉敷市　野田素身郎

握手さすつもりの酒でいがみあい
五十路近い夫のネクタイ四季がない

役人のレポート結論ぼかしてる
好転のきざしがみえて酒にする　泉佐野市　阿万万的

禅寺の廊下靴下脱いで立つ
たまに夫婦で旅に出たらと娘がすすめ
倖せの部でしょう第二の職も無事
関西線奈良県へ来た空となる　倉敷市　藤井春日

二代目の暖簾は遠に色も褪せ
激流をくぐり抜く気の木の葉です
セールスは今日も自信の狙い射ち
おいらんの島原結びや京の味　桜井市　岩本雀踊子

フト吾れにかえった衿元寒くなる
賢母と云う鼻筋が冷たくて
曲る釘お前も己もヘソ曲り
菩提寺をとえば鳩のなくしじま　柳井市　弘津柳慶

先手打つ手もおぼえて共白髪
通話料も無頓着女の長電話
いざり火が陸地のように続くなり
両親を無視して仲のいい夫婦　小松市　馬場魚山

町の祭り当てにぜんまい乾し上り
草餅でない草餅の薄緑り

継ぎ当てて着るを知らない嫁がくる
階段の風に地下街夏を知り　岡山県　嘉数千代香

ライバルの噂にパフの手が止まり
小石落つ海の深さも知らずして
倖せな中に足りない彩がある
節くれた掌のしあわせを逃がすまい　大阪市　阪上十止庵

親がいるからの無精とひと知らず
釜ケ崎器用に大中小を盛り
昭和生れに手玉明治の生きる道
クーラーのない窓ながら鳴る風鈴　八尾市　高橋夕花

寛大な夫の言葉鞭と聞く
乳液の一滴匂う愛となり
七夕に夢をえがいて髪洗う
墨すればゆかしき女の文となり　松江市　柳楽鶴丸

旧性にかえる翼は傷だらけ
錆びぬよう心の鍵の手入する
空腹の手のとどくところにりんごがあった
一たす一が暗算で出来ぬ世になった　青森県　木村涼人

継がせたくない商売にしがみつく
毛虫なら嫌い蝶なら追い廻し

恐れ入りました火葬のスピード化
過疎楽し霧雨の日に見る墨絵

大阪市　児島与呂志

菊の苗さげて娘の庭に植え
せせらぎの如く蛙の子守唄
気がかりな嘘親として聞きとがめ
陽盛りにダンプを避けて農夫立つ

鳥取市　両川洋々

妻叱る言葉である日は子を叱り
言い分があるらし台風向きを変え
父と子のレールの継ぎ目に母がおり
浮動票ここでも一票酔いつぶれ

西宮市　藤村〆女

大阪の隅で生きてるお人好し
決心のつかないままに地図たたむ
断崖に佇たせて決心聞いている
再婚の決心つかず夢を抱く

八尾市　大路美幸

もうスプーン曲げるでないぞドラ息子
苦笑する夫へ噂がまだ続き
その裏はもう言わないで眠るから
いろは坂もう山里は夕暮れる

生駒市　草深酔升

風鈴を吊ったら涼しい風になり
涼風へ青葉すなおに裏返えり
北浜で会うたら土地でも儲けとり
みほとけに縋る気持もわかりかけ

新宮市　大矢十郎

元栓を見に寝不足の妻が起き
お金ならあります音でピアノ鳴る
カタカナの料理が続く嫁が来て
原爆忌聖書にほしい一頁

平田市　久家代仕男

思惑が裏目それでもなお強気
朝顔のつぼみへやっと梅雨があけ
金策に夜道を影とふたり連れ
再婚のまだあの頃は艶もあり

奈良市　宮口笛生

墓参り亡母も一しょにいるような
一周忌墓標きれいなままにある
亡母の夢はっきり亡母の白い髪

叔父入院

お見舞へ手術の傷を見てもらい

呉市　林野甦光

一生を何考えている旅か
心継ぐ絵筆が重い原爆忌
赤い歯を出して柘榴のはにかみや
この家に馴れた鸚鵡の口答え

羽曳野市　塩満敏

好きな酒妻子でかくす病み上り

原色を着こなす女腰の線
約束の場所で愛情たしかめる
あと一歩で電車逃げて行き

大阪市　河井庸佑

商魂はこんなところにコマーシャル
ドーナツ化狭い校舎につめこまれ
釣竿のそばで大きいのがはねる
浪人の子にはきびしい夏休み

岡山県　出原敬一

土砂降りをよおやって来た請求書
ゆきずりの灯りへすがる闇の虫
もてなしの小鉢にもうれししゅんの物
独りで泣きたいのに影がついてくる

笠岡市　松本忠三

バイバイは嫌い駅前で別れ
女房のイビキ俺だけの秘密

信濃路へ

居眠りは寝覚の床を過ぎてから
梅雨晴れて木曽御嶽の雪を見る

大阪市　中川滋雀

西国松尾寺（二句）

若狭路の心を洗う山みどり
石段へ札所の雨は清く降り
人生意気に感じ差し出すものがない
お見それをされて話題がくい違い

牛追いの感傷牛は知らぬ顔
無為徒食ゴーゴーダンスで減らす靴
着流しでうどんを啜る実力者
黄昏れの雨に煙った宵祭り

岸和田市　福浦勝晴

あの雲の上に聖があると説く
青柳へ更に仲良き姉夫婦
淡緑の折紙程の町の香よ
灯をつけて白藤の白　白くなる

尼崎市　高津徹也

ピンボケの母笑ってる笑ってる
ベレー帽俳句も二三年かじり
手の内の蚊を　たたきそこねる
亀の甲羅も　お彼岸のつや

愛媛県　渡辺暁童

同僚に嫌われ上司には好かれ
今どきの若さを課長誤魔かせず
ゴマすりの員数にされ三次会
お隣りの日曜大工に目を覚まし

松江市　恒松町紅

手入れせぬ庭に自然が秋を告げ
巣立たせてからの人生に希望持つ
丁寧な方言故郷の匂う膳
今日が又良い思い出となる礼状

米子市　林瑞枝

岡山県　池田古心

悟りではなくあきらめ主義のおろかしさ
春信の描く姿体で胸を病み
温泉で独り億万長者の気で浸り
いからした肩も重みに耐え兼ねぬ

泉大津市　村上春巳

予報またはずれて傘を忘れて来
野仏の塵を流して梅雨あがる
とことんのとんまで飲んで嬉しい日
時刻表家族で夢がふくれ過ぎ

竹原市　山内静水

天地神明に恥じず一円貨拾う
さてどこへ納めた遺品のベレー帽
だまされてあげるとみなまで聞かぬ妻
熱発の妻へ朝まで寝てしまい

竹原市　三宅不朽

限りなく織らんか夫婦の糸がある
精一ッパイ雨垂れ光を抱いて落ち
灯を点すその一瞬にある平安
人間の生活しこんなに箱が要り

東京都　山根白星

シナリオの通り役所の査察すむ
美しく指一本を頬に当て
中元の予感的中して届き
硝子窓ガラスと書いて竣工す

氷見市　関美子

バイト焼け海で遊んだことにする
死んだふり虫に生活の知恵がいり
夏すでに後姿の波の色
子をかばうあまりの妻は他人の目

東大阪市　竹中肖二

悔む過去ばかりの古稀を祝われる
ライバルの出方をさぐる駒を置く
バイバイをしたのにハイヤー止めて呉れ
独酌の飯場わびしい裸球

鳥取県　清水一保

植え終えた安らぎ風呂より唄がもれ
倦怠期野党の如く喰い下り
生き抜いて螢執念の灯がきれい
太陽へデモとも行かず雨を乞い

岸和田市　葛城伊三郎

選挙戦上手に化けた方が勝ち
土壇場は神の都で泥試合い
一度管巻いて欲しいと下戸の妻
物言いへ行司は別の汗を出し

枚方市　宮川珠笑

七夕へ祈りを托す笹盗む
乾杯はビールの量を比べてる
にわか雨の予報聞きつつ水を撒く

父の享年になって

アルバムの亡父は僕より老けている　竹原市　時広一路

新しいレールがついた分岐点
磨かれて過去をすっぱり捨てた石
反対をするほどでなく黙っとく
俄か雨ためらうように降り始め　岡山県　竹内翁童

自然保護などと庭木を手入れせず
云わすだけ云わして左遷内示する
金ですむ相談だからまとまらず
棄権して開票速報に夜を徹す　大阪市　西川誓二

お位牌にすまぬがお盆の銭心算（つもり）
上が支えて味気ない事務机
印相学信じた印に嘘つかれ
御在所岳にて
湯の街をパノラマにする展望台　東大阪市　落合思月

好きなもの食べさせ医者は手をはなし
ほころびをつくろいながら夫婦老い
値上げした額にはふれないコマーシャル
日光街道にて
妻と来たケゴン彼女と見たケゴン　米子市　石垣花子

発展の港　伝説碑で残り

野辺送り終り庭の春を知り
ほめられる仏へ嫁は口をとじ
着せてからほころび繕う共稼ぎ　橿原市　岩井本蔭棒

底辺の強味言いたいことが言え
落ちそうなタバコの灰で話し好き
音ひとつせぬ長風呂へ声をかけ
君の訃へあの忠告を噛みしめる　呉市　槇田英詩

（核実験反対一句）
核実験へ平和の鐘を乱打する
メロンに生まれ手厚く並べられ
田の畦でうれしく農夫慈雨にぬれ
番号で呼び戻される貸しボート　岡山県　永宗宗義

病人へ見せる笑顔は別に持ち
売名が仮面のなさけ掛けに来る
一票の欲しい笑顔に見舞われる
蚊を払う仕草も老人じみて来る　大洲市　堀内暁風

相槌を打って余儀ない破目に落ち
スト知らぬ働き蜂の稼ぎよう
生返事又無駄足を踏まされる
憧れた椅子嬉しやら苦しやら　宿毛市　瀬田美知

養殖魚針のこわさを知らず生き
とっつきのわるい女になってふけ
梅雨晴れの犬も洗濯物のうち
昼食を真赤な爪でふるまわれ

大和郡山市　森田カズエ

扶養者欄空欄となり子等巣立つ
病棟の巡視目刺しを焼く匂い

東北を旅して

肺洗う八幡平の深呼吸
天を衝く木立ち風雨の瑞巌寺

松山市　谷のぶお

芋虫の保護食までも食い尽くし
縁の下のも一つ下の力持ち
くったくのない表情の足の裏

藤井寺市　西いわを

したくない催足をする破目となる
白い花真夏は強いものに咲く
年寄りが番をしている夏の海

松江市　舟木与根一

悩みある酒は胃の腑を動かない
ながし目に女の劫がちらと燃え

明日香村にて

宮人の恋あの山にこの川に
恐山瞑土の旅に来た感じ

岡山県　大森娯句楽

信愛の好意が担ぐ豪華葬
おしよせる輸血をよそにこときれる

京都市　都倉求芽

今があるだけ爪染めてからの夜
真っ白の履歴へ周りが色をぬり

湖西線試乗

見納めか昔ながらの鳥の海

大阪市　川口弘生

見ん事に咲いて手塩へ報ゆ花
骨董屋のあろじ骨董の顔してる
終点の戸がまだせぬ日々は旅

東広島市　高橋鬼焼

健康がほしいベッドに雨つづく
八月の陽へ折鶴の乾ききる
ひろしまへ叫ぼう平和が死んでいる

大阪市　有信新之助

背の児へ風船破った借りができ
桝呑みの塩へ酒歴の浅い指
絨緞の綾目もわからぬ灯に馴れる

八尾市　宮西弥生

さよならをする指先きもう語らない
未来図にふくれる夢は彩もたず
惜しみなくあじさい華麗にして変身

美祢市　安平次弘道

計算された隙へ素人がはまり

公害を種に漁民は堕落する
年金が増えて年寄り強くなり

笠岡市　高木桃里

分家した苦労を語る坐りだこ
天の声地の声箸を置いて読む

選挙

あだ花の魅力当選へ交り居り

東大阪市　竹中綾女

風鈴の音色試しただけの客
雨に笑む選挙のビラのやるせなさ
猫に罪負わせて破った皿を捨て

神戸市　中村ゆきを

神様にふれ合う鈴を子に引かせ
小遣いを減らされかけた通信簿
一匹の蠅が戸惑う新幹線

竹原市　森井菁居

梅雨空を見上げ夜店に策が無し
参院選済み郵便が来ぬポスト
スランプのペン先過去のページ追う

東大阪市　桑原喜風

洗濯機嫌う祖母にも一理あり
ちっぽけな社にそれなりの不況風
薄化粧老いの顔にも夢があり

倉敷市　能登原白水

風化した石が弱者の貌に見え
筆先に心がこもるコケシ描く
年輪の丸さに負けぬ金婚譜

八尾市　古川鶴声

古里は何時でも戻れと空は澄み
古里に忘れられない恋偲ぶ
古里も愛嬌で帰る選挙前

竹原市　小島蘭幸

えらい暑い日だった蟬が落ちてきて
物真似が上手で　もひとつ伸び悩む
裏へまわればなるほどよう寝てる

松原市　玉置重人

ハイミスの覚悟株式入門書
悲しい未練香水変えてみる
喪服新調して心軽くなる

大阪市　河股緑水

野良犬の自由はあるが腹がへり
ある出合い相手も俺の名を忘れ
風車回し疲れて風が止む

大阪市　神田秀峰

意地悪を云うてる間の仲の良さ
紙不足叫ばれ紙屑国に満ち
まだ借家住い空地がうらめしい

兵庫県　遠山可住

もういいかいまあだだよくされ縁
焼鳥屋表の方へ煽ぎ出し

血統書付いてる犬に歩かされ　守口市　羽原静歩

仁清は仁清　私の壺は壺

幼稚園（一句）

砂場から無欲の童心掘り起し
どの倉も傾くままに過疎の風　高槻市　山田季賛

感情は抜きだと上役に叱られる
へそ曲りと言われても僕には僕の道
眠気ざまし民謡を口ずさむ　大阪市　室谷徹舟

大胆に夏を着こなす目も馴れる
金持って歩けば人が恐く見え
長生きをしたくないとは贅沢な　和泉市　西岡洛酔

雨靴にすればちくしょう陽がのぞき
今日の糧今日を稼いで今日を生き
しみぼくろかんしゃく三代の顔は生き　兵庫県　大江秋月

三時間待たされ歯痛ちとなおり
飲む金と喫う金どっかからはじく
風鈴もしずか今夜は虫多し　笠岡市　出原真奇

雨乞いもせずに田植が無事にすみ
残り苗お前は不幸な生れなり

父の日に父は朝から溝掃除　兵庫県　河原みのる

梅雨の花蝶の宿りを乱すまい
熊の巣のようなで熟睡できる部屋
手術までしょうとは医者も云わぬ齢　今治市　原田一風

直ぐ立って行けぬ所が妻の齢
デカンショが入れ歯の抜けたとこで切れ
恐いほど日本が狭いレーダー図　守口市　野呂右近

活字どうあろうと羊紙を食べ
永年の重荷が曲げた母の腰
香港島茲もみどりに飢えた街　大阪市　津守柳信

片隅で老人ホームあたためる
世話焼が決断力を試しに来
追いかける仕事があってマイホーム　貝塚市　行天千代

父の日は好きなおはぎを仏壇へ
寡婦だとてもう騙されぬ齢になり
愛の灯を消してはならぬ共稼ぎ　仙台市　川村映輝

わが家なら釘一本に気をつかい
長生きを本人それほど喜ばず
うそつきの顔テレビで大写し

この辺でレール切換しても欲し　神戸市　佐々木静泉

悲喜交々の種子通信書を渡し　大阪市　福井野迷路

万物に方則　人にだけ運勢
鈴の音せわしく鳴った秋祭り　大阪市　鈴木生仏

物価高ぼやいて買うてゴミにする
共稼ぎ夫婦無言で汗をふき　大阪市　神谷凡九郎

女心と云うスクリーンの映像か
よろめきのドラマに捨て場女哀れにも　大阪市　今西章雅

女の勘嘘発見器より確か
貴方先に死ねと老妻らしい言　鳥取県　森田布堂

栄転というが恋まで引き裂かれ
この夏もこの木の幹で蟬が啼く　米子市　増田竹馬

独身寮寝押しズボンに筋二つ
にじみ出る汗風鈴も沈黙す　倉吉市　渡辺菩句

晩年もかくもありたい妻といる
出張に旅に出たがる妻となる　東大阪市　斎藤三十四

父の血を受けて女に弱い相

社明運動月間

保護司のねがいどの子も日本の子　大阪市　藤田頂留子

杭全祭（一句）

ダンジリもあばれさせない人の波
ブロイラーの哀れ土の香も知らず　宿毛市　山本窓花

いつの日か夢に見たよな海に来る
起用されチャンスへ三振する代打　岸和田市　林裕子

カメさんもヘドロで行けぬ竜宮城
ヘソクリで夢をかけてる宝くじ　岸和田市　深川みきを

磐若心経を彫って

雑念も共に刻んだ磐若経
痴漢出没

翌晩はまさかと思うが窓を閉め　菊沢小松園

西鶴の頃から女拗ねる癖
目に物を見せるに先立つものが入り
母方の姓を名乗って不倖
寝転べば畳離れる足の裏
傭われマダムへ春夏秋冬狂いなく　若本多久志

入院雑念

入院を勧める主治医の眼を信じ
親切が過ぎるナースに気が廻り
回診の一言一言かみしめる
塩かけて食いたいものを夢にみる
落ちつかぬベッド句想だけ走り

北川春巣

年金証書妻と長生き話し合い
階段ほどのハイヒールよろめかず
子を二人自転車へのせ核家族
文庫本のコーナー冷房届かない
モナリザの額いつからか床屋かけ

川村好郎

風化した貝殻さわやかな記憶
離れたのは昔　橋筋抱き合うて
何となく妻の圧力感じる日
逢うてきた余情を抱いている微笑
気苦労を聞いてる方も気が疲れ

西尾栞

お見舞のメロン剪る日を逸したり
売り声を噺家がしてなつかしみ
白羽の矢それから愛の鞭厳し
ふっとそんな気になってしもうた夜の街
街灯の夜霧にぬれている別れ

作

今治市　月原宵明

破れ傘夕焼を向くひきがえる
女らを酔わせて初老満足し
言い聞かせても膝頭まだ震え
長男米国夏期研修二ヵ月
神様へ願う術より知らぬ親

大洲市　米沢暁明

無駄足の目をたのしますよい眺め
口実を練るつきにくい煙草の火
退屈なからとて本を読むでなし

上田市　金子呑風

合宿の五目並べへ止まぬ雨
この盆も無縁仏の草の丈

近

どこへでも行きたい母のバス嫌い

岐阜市　市川鱗魚

一手先読んだ先様緒口を伏せ
美しい巫子がみくじの凶をくれ
愛そこに生れ貧しくとも夫婦

東京都　池口呑歩

芸のない芸者よく飲みよく喋べり
来て欲しい芸者遠くに末座酔い
三味に乗る歌は唄わぬ反主流

今治市　長野文庫

当然のつもり世間はけちと云う
仏像の方は変らず久しぶり
死に時は七十ごろと云うこわさ

誹風柳多留廿五篇研究

—（三）—

紀内恒久・室山三柳・青木迷朗
入江　勇・西原　亮・清　博美
鈴木黄・八木敬一・岡田　甫

入江　勇
（教員）
〒852　長崎市滑石町1534—162

46　樫の棒見ると疝気がはって出る

紀内—これまた良く判らない。樫と疝気の因果関係は。

青木—実感句か想像句かわからないが、堅い棒を見たり柏子木の音を聞いたりすると、下腹部の患部がはったりうずいたりして来るというのではなかろうか。

西原—樫の棒は「番人」の持ち物で、疝気やみの番太郎が、その棒にすがって出てきたという句でもあろうか。

室山—右に賛。ただし「番太郎」でなく、老人がほとんどの「辻番」であろう。まず樫の棒が見えたのでよく見ると、辻番が疝気がひどいため這うようにして出て来た、というのではなかろうか。「樫の棒」と強そうな感じのあとがミソの句？。

辻番ハ棒をつへともはしらとも
辻番ハ棒をつかぬところぶたち　三八・13
辻番に古来から有ルかしの棒　五・24

入江—賛。

清—樫の棒は、本来警備のために使うもの。それが疝気の杖になっているおかしみであろう。　天六・九・十五

八木—「疝気」がよく判らない。「広辞苑」には「漢方で、大小腸、生殖器などの下腹部内脱が痛む病気。あたはら。疝気。」とあるが、川柳では睾丸炎、副睾丸炎などをいうのであろうか。「はって出る」は「疝気持ちの人が這って出る」というより「疝気の虫が這出してくる」の意に取りたい。という訳で、樫の棒を佐渡金山の棒突と考え、棒突の棒を見ると、褌をつっ突かれはしないかと、疝気の虫が這い出して来るという句か。以上全くの駄労解。

岡田—「疝気」という病気、近ごろほとんど無いため、名医八木氏の診断もお手上げだが、江戸時代の文献の描写では、ホーデンの腫れ上がっていることを示している。確説はないが、一説を示せば、夜廻りの番太郎小屋の樫棒を見ただけで、夜番↓柏子木↓疝気にひびくことを連想し、疝気が張って痛むような気がする。

47　油絵の障子を明ケてどくをいひ

紀内—「油絵の障子」は主として髪結床で用いたらしいが、例証見つからず。よろしく御教示の程。「毒」は悪口の意、これは句にも用例多し。

落語の『浮世床』にも見られるよう、若者の溜り場であった髪結床では、このような状況は日常茶飯事であったと思われる。

西原―賛。『日本国語大辞典』の「油絵」の項に、髪結床とし、主題句を引用している。

入江―賛。外を通る女に毒舌をあびせてからかう。

油せうじからのぞいてどくをいい　安五・義5

役者絵のしゃうじを明て毒をいい　安六・五・五

岡田―同。

48　**釜払したんだをふむ油松**

紀内―「釜払」は、十二月巫女が来てへっついの厄払をすること。また「油松」は松の木の脂の多い部分。焚けば煙るのが特徴。「釜払」の儀式の内容については、『柳多留輪講・初篇』に詳しい。火をたき、鈴をもって舞ったようである。

釜はらいじゃ〳〵馬ほどに舞をまひ　拾四・8

により、相当派手に舞ったことが判る。句は、油松をたき煙もう〳〵とした中で、舞っている様を「じだんだをふむ」という成語を使って形容したもの。

青木―賛。

釜払ひ時々きざな声を出し　安四・智7

西原―賛。油松もはねる。

室山―同。「じだんだ」の原因は煙いこともあろう。青木氏ご引用の句の「きざな声」は、いまでも巫女が九字などを切る時、間々聞く。なんともいえぬ声である。

岡田―礎稿に「相当派手に舞った」とあるが、ちょっと舞うような素振りをしただけです。「じだんだを踏む」は、西原氏が「油松も跳ねる」と書いているように、火が跳ねてヤケドしそうになり、あわてて跳ねた火を足から振り払う。そうでなければ、油松が生きて来ない。

49　**むくしれる朝顔に衛士火をしめし**

紀内―「むくしれる」という語不明。

青木―同じく不明。

西原―衛士はなにしろ夜中うち火をたいているのが仕事だ。

居眠りに衛士は篝で髭をやき　九三・34

節会にも衛士のえほしの灰たらけ　室十二・宮3

「むくしれる」とは「無垢知れる」で、漸くあたりが明るくなり、清浄そのものの朝顔が見えて来たので、篝火を消したという平安ムードの想像句であろう。

室山―「むくじる」という語があって、むく（めくる・剝ぐ）の意らしいから、主題句は「朝顔」が蕾から開花する様子を「むくしれる」と表現したのではなかろうか。それで夜明けをあらわし、あとは西原説の篝火を消した、になろう。

むくじって娘に見せるきぬかつぎ　明二・宮4

入江―室山氏に賛。「剝くじれる」は方言。朝顔のつぼみがクルクルとむくれるように咲く形容。夜明けをいう。

清―同。

八木―「むくじれる」は現在も「顔がむくれているようだが腎臓が悪いのでは」などと使うことがある。一晩中篝火を焚いて、目もとが腫れぼったくなった朝の顔で、衛士が火を消した、という句であろう。

岡田―「むくじる」はハッキリしない古語ながら、無理に剝く意があるのは、室山氏が引用した里芋の句から類推される。衛士の焚く火気にあたり、その影響もあって、朝顔がまだ開く時間には早いのに開こうとする。その時間に衛士が夜勤を終えて、火を消そうと焚火に水をかける……が一解。もう一つ、八木氏説は顔にむくみが来ているのを「むくじる」と今もいうとのこと。（これ果たして江戸語・東京語？疑問。八木氏の方言ではないか）もしそういうのなら、一晩中火を焚き寝ないでいて、また煙で眼を痛め、眼が腫れ、顔がむくんだ感じがする……ということになる。とにかくムクジルの語をもう少し研究する必要があろう。

×

▼清　博美氏の新住所―〒421―32静岡県庵原郡蒲原町富士見町三ノ十二

シベリアお菊

東野大八

石丸弥平君が〝サンダカン八番娼館〟を書いた山崎朋子女史を紹介してあげよう、といってくれたのは昨年暮に上京した時のことであった。日程の都合でとうとうその機会もなく帰宅したが、このほど、問題のサンダカンを読んでみた。

この本の主人公は、ボルネオのサンダカンにまで出稼ぎにいった島原の娼婦〝からゆきさん〟出身の老婆の家に住みつき、遠いかつての日のサンダカンにおける痛ましいばかりの娼婦たちの生活をきき出してまとめたものである。中国大陸で、わが青春記の大半をすり減らしてきた私にとって、からゆきさんとの因縁まことに浅からぬものがある。それだけにこの本の後味には、そうした意味もふくめて、私の感慨に深い感銘を残してくれた。私もはるかなるかつての日、一人の老からゆきさんの姿を求めて、中国東北（旧満州国）のさいはての地、アムールにまで足を運んだことである。想えば三十余年もむかしの古い古い話である。

アムール（黒竜江）は、中国東北の最北端を蛇行するダイナミックそのものの大河だが、その中に黒河（ヘイホー）（現在の愛輝（アイホエ））がある。対岸はソ連領シベリアの最南端都市ブラゴベシチェンスクである。

黒河の川ぞいの宿はアムールホテル。ホテルとは名のみの、まことにお粗末な木賃ホテルで、板壁に青ペンキをべたべたぬりたくり、赤い日満露語でホテルの名が風雪にさらされてかすんでみえる。泥柳と白樺の疎林に囲まれた北向きの窓に立つと、クギづけの汚れた二重窓越しにブラゴエの街が望見された。まるでユリトロの小品でもみるような、白とセピアと赤の屋根や壁が、真青な緑の地平線の天地にまるで吸い込まれそうに散在している。

私の旅の目的は、満州国北辺の砂金現地ルポの取材にあったが、これとは別に最も大きな取材対象の楽しみはシベリアお菊にあうことにあった。

シベリアお菊は、文字通りのからゆき（唐行き）さんで、七つの歳に朝鮮の平壌に売りとばされ、大陸を放浪、ハバロウスク、ブラゴエなどで日本軍の慰安婦を経験、その挙句靠山という間島地方の大馬賊の妾となった。駢馬を操って北満馬賊の先頭を切り、拳銃の手練は度胆のよさと相まって男まさりのその実力は部下二百人を率いるにおよんだ。彼女の発行する保票（通行手形）は、南満にまで効率を発揮したため、一枚放外の高値をよんだといわれている。

彼女の人生訓は、人間は国籍を越えてすべて平等であるということが信念であった。露人もシナ人も朝鮮人も日本人もすべて上下のへだたりを持たず、決して差別しなかったため部下の連中は彼女を「母」と尊敬し、彼女のために死も厭わなかった。

日本の高級将校なども彼女にかかると

「軍服を脱ぎさっとじや、そんなもの着とるとばい、人間は人間でのうなるとじや」

といった調子で頭からボロくそである。

「日本は海の向うでかがり火の如くかっかと燃えとるばい。それでよかとじゃあ。わしや、内地にはもうかえれる身体じゃなか、大陸のコヤシにさなって、墓なぞいらんと…」

土と垢にまみれた綿服で、彼女のこの言葉は、彼女の心そのものすら、黄土層の風や雲のなかにかなぐり捨ててしまっている。幼いころからぼろ屑のように慰安婦のあけくれで跡形もなくひき裂かれてしまった彼女の青春——若い私はシベリアお菊こと出上キクの生涯をこうした断片的な記録によって、いつかの日からか強い魅惑の女性観を作りあげてしまっていたのである。

すさまじい南京虫と、煤珠児の鼻をつく悪臭と斗いつつアムールホテルの朝があけた。

粗末な玄関傍のボロソファーに這い出た私へ、フロント風な帖場の老婆が声をかけた。

「キクさんとこへ、これからいきなさるとな」

棒ずりの雑巾の柄をさげて裏口からこういいながら現れた。態度、物腰あきらかにこのかくしゃくたる七十婆さんもからゆきの出と知れた。ここへ着くなりのお菊さんの話に、あうなら明けやらぬ朝ほどよいとのことからきたあいさつだ。

風化した黒練瓦の多い黒河の街は、八月の朝というのに初秋の朝のように靄が深い。その中を教えられた老婆の家へ急ぐ話。カメラを肩に弾む足は軽い。さあ、彼女にあえるのだ。

その家は人一人やっと通れるほどの暗い胡白の中にあった。つぎはぎだらけの汚いガラス戸をながいこと低く叩きつづけて、やっと中から人の気配が感じられる。無言のまま、内側からさしがねを外す音がした。

注意深く押してみると戸は風のように横へ動いた。そしてつっ立ったまま内部をみた私は、思わず息をのんだ。なんとそこには猫、猫、猫がひしめくように押し並んでいる。その猫の無気味に光る眼の砲列の中に、ちょこんと、置きものの猫のような一抱えほどの老婆がキョトンと私を見上げていたのである。

人間一人が立てばもはやいっぱいの、形ばかりの土間へ両足を下ろし、すり切れたアンペラの上りがまちに腰をもたせた老婆は、さも大仕事をしたあとのようなけだるさで、どっこいしょと足を上にひきあげ、四角にちょこなんと坐ってペコリと頭一つを下げた。そして、しばらくお待ちを——といった。さしずめお茶でもいれる気らしい。私は悪臭鼻をつく猫の体質にへきえきしながら、手を振ってお茶だけはと大声で断った。

十数ひき、いや二十ぴきは越えていよう。黒や白、茶にまだらなの、大きいの短いの、大小さまざまの猫どもが四畳半にも満たない薄暗りの部屋中に充満している感じ。この猫どもは部屋中至るところからギラギラと眼を光らせ、老婆より私の顔に興味を集中させ、舌なめずりをして何か出せという貌や、みじろぎもせずねめつけるのもいる。上りがまちの二、三ぴきは至極人懐っこくて、まあかけな、という風につくねんと腰をすえ、私を細目で見上げている。だが啼き声は絶間なしだ。ニャオ、ニャオ、ウー、ウー。

老婆はぽかんとその猫の中に、無言で畏ったままだ。小さいその膝へ、横合いから二、三ぴきがかけ上ろうと争いあう。それらに老婆は小声で叱ると、エライもので家中の猫がぴたりとてんでの位置で静坐に入り、ニャオともいわなくなった。

「私もおみかけ通りの八十婆あで、おツムもぼけるし、耳もきこえぬまるで猫じや」

そういって彼女ははじめて伏目の顔をあげて笑った。まるで鼠穴のようなその暗い汚れた小さい口。

私は結局、一言も言葉を交さず引退ったというのが正直な話だ。

「シベリアお菊と申しても本モノどころか二人も三人もいるぞな。若いころのお客の毒が頭に上ってしもうてからに、あのキク婆さんもこれまでじゃて、ムゴか墓無しじゃよ」

アムールホテルの老婆はそういって手バナをかんだことである。シベリアお菊や満州お菊、ブラゴエお春にアムールお花……慰安婦上りの、からゆきさんの末期は、その呼称一つでまさにはかなしの老醜をさらし、路傍の病み猫さながらに異国の土に還るのである。

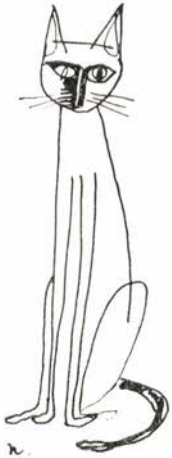
川柳と阿部次郎氏

石崎柳石

阿部次郎氏は、思想家・評論家として衆知の方であり、夏目漱石門下の四天王（小宮豊隆・寺田寅彦・安倍能成）の一人と称せられる。茲に、大類伸監修「世界人名辞典」（東洋篇、昭和廿七年六月十五日発行、東京堂）と、「日本と世界の人名大事典」（昭和四十七年五月一日発行、むさし書房）との二書に拠ってアレンジして、阿部次郎氏の履歴業績を顧回してみる。前書は氏の生前の著であり、後書は没後の著であるからである。

阿部次郎氏（一八八三、明治一六年八月廿七日生―一九五九、昭和三四年没）大正・昭和前期の思想家・評論家。山形県の生まれ。一九〇七年東大哲学科卒業。在学中小山内薫らと「帝国文学」を編集し、〇九年夏目漱石の門に入って文芸・哲学の評論に専念した。一七年雑誌「思潮」を主幹した。新カント派哲学者の立場から「人格主義」を唱え、研究の対象は思想・芸術の分野にまで及んだ。「三太郎の日記」等は学生層に大きな影響を与えた。一八二二―四六年東北大教授、その間ヨーロッパに留学し、また美学の体系化に努めた。東北大では美学を講じた。理想主義・人格主義を唱え、大正・昭和前期の思想界に大きな影響を与えた。芭蕉・ゲーテなど東西の文化を研究し著書を出した。著書には「美学」「倫理学の根本問題」「人格主義」「世界文化と日本文化」「北郊雑記」「徳川時代の芸術と社会」「ニーチェのツアラツストラ解釈並に批評」などがある。

その著「残照」（昭和二十四年八月廿日発行、羽田書店）に記載された「川柳思案の余」に就いて、氏の川柳並びに之が論考を一瞥してみる。この著は、所謂終戦直後に当る出版物であり、その前の言論圧迫の時勢下に、何故に氏が川柳を作ったか、この川柳に「憂国の至情」がどのようにこめられているか、戦争時局と相関して、これ以外に鬱情のはけ口がなかった。この川柳の発表は、東北大新聞の発刊に於てなされ、時は昭和廿一年四月十日であった。以下之が全文全句を転録する。



川柳思案之余

昭和十七年、私は病余の身をやしなふべく例年のやうに高原に一夏を送ってゐた。第二次世界戦争が勃発してからまだ半歳を経過したのみであったが、国家のために深憂すべき事態がすでに処々に出現して、山中の逸民にもさすが忡々の念なきを得なかった。しかし当時言論の束縛甚しく、殊に時局に関するものは、讃美以外はほとんど禁遏にも近い状態であったために、私には公に直接これを吐露する道を発見する力がなかった。その結果、私の憂国の至情は、不思議にも、三十余首の「川柳」の姿をとって手帖の一隅に書きとめられることになったのである。私はいま東北帝大新聞発刊の餞に、これを異れる（痛むべ

き）状勢のもとにこゝに公表する。もっともその一部分は、当時の内務大臣が知人であったので、彼の参考に書き送った。彼からの返事がなかったことは勿論である。しかしその後尾行をつけられることもなく、山中の逸民が山下市井の生活を従前通りのび〳〵とフラ〳〵と送ってゆくに任せてくれたのは、さすがに「彼」といふべきである。

読者はこの川柳群の内容が単に暗黒面摘発の諷刺のみではなく、賢明なる讃美をも交へてゐることを訝るであらう。しかしこの讃美が何に、また誰に、向ふかは註釈するまでもあるまい。私の胸中にある理想的政治家の影像がこの闇の世界に光を導きいれて、とにかくこの素描を明暗の交錯する一枚の戯画に仕上げたのである。その闇は一日も早く姿を消すがいゝ、さうしてこの光は新しき曙のやうに次第にその輝きをますがいゝ。

（昭和廿一年四月十日）

せいでもの事に夜なべは栄耀なり
この腕を見ろと縁側持上げる
素人は何でも出来るつもりでゐ
金太郎松を揮って森を薙ぎ
敏腕の跡片付は後の知事
仕来りを生かすが骨と老子云ひ
子を縛り創意を出せと無理を云ひ
危さは一億人が嘘を吐き
憂国を誤国とすれば国滅び
ラジオ鳴る自己陶酔の大一座
本酔と酔うた仮面とおべッかと
口抑へこれを喰へと拳固なり
俺達を悪く云はぬが忠義ぢゃぞ
信頼を実行で獲て国栄え
不自由を自由に育て賢母なり
大一座自己陶酔で惣泣に
功を褒め慢を抑へて末長く
上役は睨み利かすが役目なり
立身の手蔓と闇を征伐し
よく見れば袖の下行く闇の音
出世餓鬼欲得鎌鬼に説法し
大和尚己が無慾で餓鬼を度し
輪を狭く闇を大目で世が腐り
寛き輪を厳に守って民服し
これ位構ふものかで紊れそめ
孫子苦笑して曰く敵の長見るなかネ
一致は一致でも三ツ指式ぢゃ腹で揉め
参考に京童（わらんべ）の謡を聞き
悪口を集めて置いて役に立て
人心の腐るがいッち恐ろしい
繕めるに嘘を吐かせぬ大手腕
批評とは処士横議さと身に媚びる
文士も総理も批評が嫌ひなり
何とでも云へ民は我にと大自信
名相は無視されぬ評あるを知り
諫鼓苦むしておべッ蚊飛出し

以上三十六句

川柳は単に暗黒面の摘発の諷刺のみではないと云う。賢明なる讃美も交えていると云う。それは闇の世界に、新しい曙光を投げかける理想的政治家の影像が祈念せられているからである。何故に氏が川柳に「憂国の至情」を託したのか。これは、かつての封建時下と同様に言論の束縛に由る。不思議にも三十六句の「川柳」の姿に、その至情はこめられて吟詠せられる。ここに短詩川柳の本質に結付くものがある。氏の著に「徳川時代の芸術と社会」が在る所以でもある。

思想家・評論家阿部次郎氏に、思案の余りの裡に生れ出でた「川柳」のあったことは、時と人と味読さるべきであろう。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 三四五二－四
夜間 四四〇八

10月6日（日）よ早く来い！

49年度二賞発表句会と同人総会

―各地の指導者と本社句会幹事表彰―

―八月三日本社常任理事会から

毎年のことだが、10月の会には会場難で苦しめられる。ホームグランドの「以和貴荘」は、会場よし地の理よし、かてて安くて申分ないのだが、10月の結婚シーズンには、シャットアウトである。

そこで句集刊行記念句会の「教育会館」を再度会場にすることにしたが、実は裏ばなしをすると「以和貴荘」の約五倍の借用費になる。議論がわいたが会費五百円にすることになった。この点、ご諒恕のほどを。

今年は本社創立十周年ということで、各地のリーダーで常に協力的である人々を表彰することにした。そして兼・席題の選をお願いすることにきまった。つぎに雅名を発表する以外にも、まだまだ多くの人がおられるが、今回は左の方々にしぼった。

順不同で申しあげると。

尼縁之助（いずも川柳会）伊藤茶仏（川柳わかまつ）臼井三林坊（川柳たましま）岡崎祥月（川柳塔まつえ）浜田久米雄（備前川柳社ほか）浜野奇童（弓削川柳社）藤井明朗（むらくも川柳会）小西無鬼（川柳塔ささやま）山内静水（竹原川柳会）諸氏。

それから本社句会発展のため寄与された方々も表彰することになった。この人たち以外にも多くの方がおられるが今回は左の方々である。

菊田いさむ（句会部長）西田柳宏子（句会副部長）児島与呂志（受付け係として自安寺・天性寺時代から場内準備を一人でされた）金井文秋（受付け）河井庸佑（句会の清記）中川滋雀（表彰状ほか麗筆ふるう）諸氏。

出席―古方・庸佑・柳志・多久志・形水・薫風・水客・一三夫諸氏。

（七月四日常任理事会）

まず出来上った句集が机上に高く積まれてある。不二田から出来上りの説明、生々庵主幹や多久志副理事長からその労をねぎらわれた。薫風大会委員長から七日に迫った大会準備完了を報告。川柳塔の真価を問う大会へ各氏の顔も緊張の色がみなぎっていた。

出席―多久志・柳志・いわを・薫風・生々庵・小松園・栞・文秋・一三夫諸氏。（不）

きのう・きょう

本多柳志

◇前の文化庁長官、今日出海氏から聞いた話。氏の友人で東大出の秀才が英国の名門大学で法律を学んだ。が学年試験に落第した。腑に落ちない秀才子は教授に怒鳴りこんだ。私の答案のどこがいけないのかと。教授はいとも静かに「君の答案は私の講義の丸暗記である。あれなら書物を読めばよろしい。大学へ来る必要はない。私の望むのは私の講義を踏み台にした貴方の創意です。君の斬新なイマジネーションがほしいのです」と答えた。

最近、私は司馬遼太郎氏のテレビ対談を聞いて大いに悟るところがあった。氏は「テレビドラマを見ていても、シナリオを読んでも日本人の創意のなさにはあきれてしまう。どうしてこうも日本人には創意がないのであろうか。その一番の原因は、学校教育のあり方に問題があるようだ。学校では一つのパターンに従って教育する。其のパターンに最もよくハメ込まれたものが、学業優秀ということになる。上級学校の試験もその通りだ。そのパターンをそつなくこなして来たのが、東大出の所謂秀才ということだ。

テレビドラマや小説なら〝東大出だから創意のないのも仕方がないさ〟ですむが、事が政治や外交となるとそうはいかない。さきの大戦でインパールで戦った英国将校が〝日本軍はどうしてこうも同じ戦法ばかりくり返すのだろう。何度も戦っているうちにすっかり次の作戦の内容が読み取れるようになった〟と言ったそうな。

これでは負ける筈だ。作戦の指揮は参謀がやる。参謀の彼らが中学校―士官学校―陸大で教えられたのは、孫子の兵法から採った教科書である。発想はそれ以外のところからは生れて来ない。軌道をたんねんにたどれば次

49年度二賞発表句会と同人総会

—川柳塔社主催—

日　時　昭和49年10月6日（日）午後1時開場

会　場　大阪府教育会館新館四階大ホール

（天王寺区東高津町12—2・但し上本町6丁目交差点東北百米）

—電　話　761-7066・7050番—

▼同人総会は午後2時～3時30分。（同人総会の案内状は出しませんが出席者によって議題を採決させていただきます）

—同人総会の会場は三階ホールです。

式次第—司会・西尾栞—開会の辞・川村好郎—挨拶と経過報告および本年度事業報告・中島生々庵—会計報告と質疑応答・若本多久志—閉会の辞・菊沢小松園。

▼懇親宴は同会場で4時～5時（会費千円）同人以外の方でもご参加ください。

▼二賞発表句会は5時30分から**（会場は四階大ホール）**

柳　話　中島生々庵

—本社句会部幹事表彰

—各地指導者表彰。

—路郎賞・川柳塔賞受賞者表彰

兼　題　「世話役」　伊藤茶仏　選

「　栗　」　小西無鬼　選

「酒　豪」　浜田久米雄　選

「文学碑」　尼　緑之助　選

席　題　**（選者は浜野奇童・山内静水・臼井三林坊）**なおこのほかに表彰をうける人**（岡崎祥月・藤井明朗）**

会　費　五百円

—開会9時—

（ご宿泊などのご相談は本社板尾岳人までご連絡ください）

の手は読みとれる。其の日本軍が五年の間ももちこたえたのは、孫子の兵法なんかくそ喰えと作戦の常識を超越した下士官や兵隊が強かったのだ」と司馬氏は言い切った。

ここで思い当ることがある。先進諸国の学校では教科書を参考にしてものを教えるが、日本では専ら教科書だけを教える。教科書でものを教えるのと、教科書を教えるのとでは結果に於いて、こうも違って来るものだということを悟った次第である。

◇創意を、イマジネーションを要求しているのは決してこの英国の大学ではない。わが川柳界でも例外ではない。幸い川柳には俳句や詩とちがって其の表現に何の制限もない。「元日の暮るる」でも「表札に雪」でも詩になっていれば一向に構わん訳である。私共選句していても、発想のユニークな句には選者としてとても引かれるものである。一題三句の場合せめて一句位は選者を試して見るつもりで、思い切って奇抜な発想をユニークな表現で作句して見てはどうだろうか。川雑に書いた柳志寸言の中で「作家にとって最良の時は二回ある。自分の句が天にぬけた時と全没になった時とである」はこのことを言ったつもりである。こんなことは古い川柳観が心のしんまでしみ込んだような老作家に望むことは仲々無理な気がする。望みたいのは近代感覚を身につけた、若い作家の勇気と英知に期待したいものである。

—正論を書きたいペンに要る勇気　柳　志

川村好郎選

岡山県　谷川渥子

鎖断ちきって鎖のない不安
もう一つの貌で退社ベルを聴く
両の手に女の業の重たさよ
敗北へ足袋の白さに救われる
いつの間にか私も数字にされている

和歌山市　樫村ふみよ

春宵を語りつくせぬ水入らず
すきだらけの家で笑いももれやすく
同じ世を楽観論と悲観論
一本の電話で憂さを流し合い

大阪市　秋田茂

傷心に月は斜めの輪をえがく
銀河鉄道天国行きは座席指定です
額の汗を僕の勲章とする
一匹の蚊が今日の僕を責めている

弘前市　小山内貞男

人生の縮図を見せてバラは散り
節約は筋金入りのおばあちゃん
ひたすらに香車のように生きた過去
運命といと簡単に他人言い

岡山県　長尾保

きょうもまた鋳型にはまる宮仕え
子にそそぐ愛鋳型かも知れず
裏判を連られ約手の放浪記
小細工のすぎた植木の枝が折れ

和歌山市　井上マサ子

十五年打てばひびく仲で生き
句にすがる一人の窓に梅雨止まず
逆うも妥協の余地をのこしとき
お土産のアリバイつめた紙バッグ

大阪市　稲本凡子

恍惚の伯母と
団らんもなく恍惚と向き合わせ
あきらめて耐えることにも馴れた日々
恍惚に振り廻わされた日曜日

行く家もないこの人の涙拭いてあげ
和歌山市　吉野冨江

美容院愚痴ものろけも聞く鏡
覗かれた貧乏神に湧く闘志
復縁へ牽制球を投げてみる
雲つかむような話に乗るピンチ
柏原市　小谷葉子

盲目の夢を与えし鏡台か
未練を閉じて炎天をひた走る
償いの果ての細いシルエット
幻しに甘えて女のおろかなる
和歌山市　秋月宏方

古希もすぎもう人生の地図いらず
尾を振って吼えて小犬も意思表示

飛水峡にて

神さまのお庭作りも上手だネ
今治市　渡辺伊津志

果て知らず流れる水のよどみなし
歌わせる仕組みスナック良くはやり
灯台を浮き彫りにする海の碧
東京都　宮崎美津子

明治神宮菖蒲園拝観（一句）

平日も沸かす菖蒲のたたずまい
老眼と白髪になって許し合い
残り火の妬心時効にしてくれず
尼崎市　小林文月

銀行は保険屋程には口説きかね
記念切手列の長さで価値を知り
嫂さんと呼ぶには若く美しく
島根県　谷岡芳枝

言い負かす子の歯応えにうろたえる
紅一点煮えつまる頃口を切り
行くあてもない朝食を急かすのか
高槻市　竹内花代子

ひまなのが詩吟すすめにやって来る
アジサイの雨通勤の足を止め
早咲きの一番花をいつくしみ
豊中市　安藤寿美子

雷もおとせぬ親爺になり下り
身ぶるいを又して日本病んでいる
授かりし生命朝顔蔓のばす
愛媛県　小山悠泉

はねつるべの音で故郷の朝が明け
人妻と歩く歩巾へ気を遣い
金貯める秘訣を聞けば金がいり
和歌山市　内芝としよ

わからない読めないサインしてもらい
丸い顔浮べて可愛いい浴衣縫う
時折は逆らって欲しい素直な娘
和歌山市　若宮武雄

無い金がおごりたくなるうれしい日
打つ方が痛さこらえる愛の鞭
流行を追うて暮しに追われてる
島根県　飯塚虎秋

句作する心の隅に亡妻微笑
孫あり詩あり心の支え失わず
明治の話　昭和耳の裏で聞き
鳥取市　大塚豊生

夕陽落つあと一匹の鮎を追う
愛の城築く荷札ペン走る
墓参りいつか夫婦で住むところ
尼崎市　中谷利美

ひょっとせば畳の上で死ねぬ職
愛情をバカと表現する夫
金策の旅を近所で羨まれ
羽咋市　三宅ろ亭

大自然怒れば人間の知恵も飛び
刈られてもなお刈られても芦は伸び
蜩よなぜ駆け立てる無情観
高知市　古谷恭一

廃村に鬱然と湧く蟬しぐれ
宿酔のふとんが重くなってくる
少年の胸にナイフを秘めている
鳥取県　田川はじめ

開発に街の個性が失われ
ふる里の土が箱庭からあふれ
試歩の杖励ます母も汗を拭き
今治市　古野伶人

ゼネストの後の態度が面憎い
利用する知恵を待ってる廃棄物
今年のも上手に書いてある釣書
出雲市　谷口あきら

苛立ちを妻子に見せじと酒にする
有難うお世話する身もされる身も
包丁は切れぬと知った妻病みて
吹田市　藤原世史春

紋付きが変った人に落ちつかせ
クッシャミを仕損なったり蠅が来て
掛けぬのも悪し厚意の狭い席
岡山県　山田止水

新墓石金の臭いの高野山
鯉のぼり内の娘も買えと言う
備前市　武内雅堂

左遷地へ来て友情の有難さ
人妻を狙えば銃が錆びてくる
大阪市　堀口欣一

上様がまだ生きている領収書
このあたり嵯峨野を語る何もなし
大阪市　神夏磯道子

掃き溜めとなって家中の小言聞く

Lサイズ豊かに見えた同窓会　橿原市　西本保夫

せめて子に頼らぬ父となってやる
淡々と語る汚職のない社員　新潟県　高野不二

思い出せぬままにあいさつして別れ
子の土産選ぶ苦労も旅のもの　名古屋市　大林曲ん手

朝の靴働く方へ向けてある
子には子の器で水はこぼさせず　七尾市　松高秀峰

前向きの意見もやっぱりいやがられ
口出さぬつもりへ助言求められ　西宮市　両川康博

岩田帯締めて流行あきらめる
労わりの言葉へ新たな闘志湧く　青森県　荒田つる

潔癖が過ぎていまだに許せない
良妻か賢母かかしずくだけで老い　高知市　竹崎寛

澄んだ瞳にも一度逢いたくなる私
いざなわれてみたくなる愛の瞳よ　大阪市　須浦つね

寂しさを花と語って今日もくれ
一票の主張私は替らない　大阪市　内藤ますえ

雑草にたとえ生き抜く人間味
珍客の手持ち無沙汰が子をほめる　島根県　槻谷一葉

新調へポーズをとってうぬぼれる
若い命吸うて海の青が澄み　鳥取県　伊藤静枝

順風に乗って過分の欲かける
反抗のやる方なくて石を蹴り　今治市　真山国彦

診察の途中で票を頼まれる
原点に帰れば孝友和信なり　今治市　今井松花

美女美男ポスター並ぶ全国区
速報と云う開票のじれったさ　和歌山市　津田与史

晩酌の小びん重たく感ずる日
いさかいの後は空虚に梅雨を聞く　岸和田市　池田香珠夫

トントンと縁談本人知らぬ間に
晴も読み雨も読むだけの佗住居　倉敷市　高山みどり

九階へ見舞う私もしんどくて
ふれられぬ病名だから雨しとど　兵庫県　高橋近江

山又山母波へ公害まだ遠く
米子市　江原良二

一生の矩さを知る下り坂
米子市　江原良二

饒舌で云わずもがなの汗を拭く
大阪市　横地正彰

金らんの法衣を脱げば只の人
大阪市　横地正彰

はったりの髯消えていた戦友会
宝塚市　吉田とんぼ

病人は必死医者の眼他人の眼
宝塚市　吉田とんぼ

ついで参り叱りはしまい亡母の墓
松江市　梅本登美也

後悔へ心の鈴も鳴りひそめ
松江市　梅本登美也

愚痴多い人と飲み交う昼の酒
鳥取県　福田保子

幸運と不運が巷ですれ違い
鳥取県　福田保子

一本のレールへ妻と共に生き
鳥取市　尾崎泰山

政策の谷間に生きる老夫婦
鳥取市　尾崎泰山

東京がなんだと先祖の地を守り
鳥取県　徳安満水

忍び寄る老い針の穴がぼけ
鳥取県　徳安満水

うっかりと話し渦中の人にされ
和歌山市　沢山福水

胸襟を開いた話が又こじれ
和歌山市　沢山福水

公害も知らず奥津城蟬が鳴く
姫路市　大原葉香

物言わぬ花のいのちへ血が通う
姫路市　大原葉香

補聴器で定年延長の日を生きる
大阪市　新川貞祐

錠かけておきたい女の乳房見る
大阪市　新川貞祐

父の日別居の誰も来ず暮れる
尼崎市　大垣たもつ

何見ても聞いてもたかぶりなき余命
尼崎市　大垣たもつ

十年の一日分これが退職金
高槻市　山田スミ子

くじ付きの定期に振替えられただけ
高槻市　山田スミ子

ビニールで育つ太陽知らずとも
須賀川市　平栗金太郎

庭下駄の花緒のゆるみ梅雨日和
須賀川市　平栗金太郎

強いと云う予想ダルマに目が入らず
守口市　岸本豊平次

白杖の先きで大地に話しかけ
伊丹市　樫谷漫柳

待たされて死亡欄まで目を通し
寝屋川市　福富隆子

母の夢何か心の重い朝
寝屋川市　福富隆子

島根県　岩田三和
岩つつじ天水だけが頼りです

新見市　吉田落猿
墨のかび拭いて暑中見舞書く

松江市　岡崎雪美
七夕の出合いのような同窓会

鳥取県　加藤茶人
傷心が癒えないままに増える酒

鳥取県　福田陽山
クーラーが避暑のつもりで風邪を引き

今治市　大本バット
落ち人を売り物にして稼ぐ村

今治市　伊藤一郎
治療よりしゃべりに来てる待合室

大阪市　平井露芳
螢狩りついでに恋の灯も探し

鳥取県　林露杖
みな巣立ち語ることなき夜の二人

青森県　波ただお
宵宮の花火金魚も跳ねて見せ

大和高田市　上田呑歩利
辣腕も破産をすれば只の木偶

滋賀県　柚木踏草

銭亀の乾きすぎてる子供の掌

鳥取市　勝山紫宏
二次会に選挙の網がかぶせられ

島根県　宍戸千草
酒が出るまでは動かぬ客が来る

堺市　栗本藤持
法師蟬声を枯らして生き延びぬ

泉佐野市　大工静子
雨が降りする事もなき孤独感

寝屋川市　江口度
出勤のあせりとがめる赤信号

出雲市　藤井晴月
儚なきは恋の生命か花なるか

八戸市　安田勝巳
看護婦として抜群妻として足りず

大阪市　浜西駒子
世渡りをとんちんかんで送ろうか

大阪市　村島秀村
花菖蒲広い園内せまく見せ

大阪市　坂本喜洸
暮しにくい浮世に寿命だけが延び

大阪市　花田繁子
旅疲れして洗濯で又つかれ

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

折れそうな弓に頑固な矢を支がえ

永宗宗義

折れそうな弓はひ弱な身体のことである。頑固な矢は誰にも負けまいとする前進の心である。いつ倒れるかわかりもしない弱体を持っているのに考えること言うことは体に反して元気である人間の自嘲の句ととりたい。弱ければ弱いようにおとなしくしておればよいのにこれが出来ない個性はむしろあわれみを感じる。支がえは番えがよいのではなかろうか。

隙のない男の裏がのぞきたい

江城修史

立居振舞に寸分の隙を見せぬ男。態度言葉に誰をも寄せつけない男。これを見ていると人間としての味がないように見えるのである。が果してこの男裏へ回って見ればどんなことをしているのだろうか。その反面を覗ければ興味があるような気もする。人間の味というものは少々隙があってもよいのではなかろうか。反って反発を覚える人間像ではある。

くしゃみひとつで家中の箸止まり

堀江芳子

家中の箸止まりが面白味を感じさせる。子供のくしゃみか老人のくしゃみかわからないがお膳に向かっている家内中のなかで一人がくしゃみをしたことでみんなの目がくしゃみに集まった一瞬、その様子が見えるようだ。

相性はほんとらし　くされ縁という夫婦

藤井明朗

相性がよいとか悪いとか言って見たところで一億人を越す人口のなかでほんとうに相性のよいカップルはそう沢山はいないようだ。相性を見てもらって結婚はしたものの一人の男と一人の女のつなぎ合わせに過ぎないのだからそのうちにお互に不満が生じて来る。くされ縁とは当人には気の毒だがうまいことを言った言葉である。

墓石が語る老後の不仕合わせ

舟木与根一

老人の福祉が盛んに叫ばれている世の中ではあるが、ひとり暮しの老人、老人ホームの老人、寝たきりの老人はやはり孤独であり心淋しいものだ。その人達はいつかは墓になって建てられるのだが老後の不仕合わせはみんながよく知っている。墓石は語らないがまことに淋しいことだ。

編み棒は心の乱れ知っていた

原独仙

心が乱れている人の手先はやはり乱れて来るに違いない。編み物をしている人の心が乱れておれば目を飛ばしたり毛糸を間違えたりする。編み棒に限ったことではなく、心外に表われる人の気持を編み棒によって表現しているので人の心と動作は切り離すことは出来ない。

接岸と同時四国の島が揺れ

渡辺菩句

変った着想である。旅人を乗せた船が四国の港に着いた。接岸した一瞬衝撃が起こる。もち論船に乗っている人へのショックではあるが乗っている人から見れば四国という大きな島が揺れたというすこし大袈裟な見方をするのが旅の楽しさのひとつではなかろうか。

戸田古方著

『古方手書き句集』

ご好評をいただいておりますが、著者の申し出により、これで打ちきらせていただきます。

川柳塔社

水煙抄

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

老いしかなむかしミナミの密猟者
山根白星

年輪をかみしめる都会の密猟者、句主は東京であるがミナミとは大阪のことであろうか。誰かの小説の終局のようなムードを感じるが老いしかなで一字明ける配慮が欲しい。

垣根から花のぞくそれだけの幸
松本文子

垣根にのぞく小さな花の色、それだけの当り前のことが幸せに思われるほど我々の生活は追い詰められている。

丸すぎて置かれたとこへ落ち付けず
若宮武雄

平らな所へ置かれた丸い玉、何か人生を諷しているようで心に残る。

閉された扉の前に待つばかり
槻谷一葉

閉された扇とは、神の審判であろうか、それとも人の心であろうか。人間の弱さと強さを見せつけられる気がする。

空の青とて童女の瞳には勝てぬ
秋田茂

透きとおる空の青と澄みきった童女の瞳と言いつくされたモチーフではあるが、その素直さが捨てがたい。

久し振り故里心を遊ばせる
谷岡芳枝

心を遊ばせるのゆとりが、この句を救っている。この場合、故里か心かどちらかを仮名にして視覚からくる固さを除くことを考えて欲しい。

嫁がせた後も親馬鹿まだつづけ
小山悠泉

親ばかぶりが眼に見えるようで何かこころ楽しい。

損得がないので派手に手を叩き
林露杖

大衆というものの無責任さを思わせられる

上るから買えと商人ぬけめなし
竹内花代子

奥さん20日から値が上りますからと、如何にもお得意さんらしく耳打ちして呉れるのも商人と云うものか。

だんだんに期待が末の子に移り
岡英好

親の欲目と人間のあきらめが微妙にからみ合う。

無視された一日だった手を洗う
小谷葉子

下五手を洗うに、世間への強い反撥と自分の心に対する慰めがあると思う。

水道の水出ることも有難し
堀口欣一

栓をひねれば水道の水が出、スイッチをひねれば電灯が点く、考えてみれば我々は感謝の念を忘れているようである。

どっちでもいいのがまじる多数決
高野不二

これが民主々義というものの実態ででもあろうか。

病床で長寿の予告思い出し
奥井春子

溺れる者はというほどでは無くても、貴女は長命の相があると云われたことが、ほのぼのと心の支えになっている。

真夜中の地球の中にひとりいる
岡崎雪美

人間は所詮ひとり、孤独感をとらえて見事である。

中津泰人著

川柳句集『慟哭』（非売品）

著者ご夫妻は共に被爆者で、夫人は五年前に発病、氏も被爆症の徴候こそないそうだが健康すぐれず医薬をはなせぬという。

呉原爆被爆者友の会を結成、推されて会長として活躍されている。（不）

—原爆砂漠恥毛を蝿に晒されて

発行者　呉市本通四丁目六—七　中野泰人

川柳塔社創立10周年記念

同人句集『川柳塔』について

この種の原稿は書きにくいものだ。それを承知であえてお願いした。ありがとうございました。（原稿到着順）

田中好啓

同人句集「川柳塔」拝見

手にしてずっしりと重い同人句集である。作品の正味五一四頁、活字の大きさは、読みやすく親しみを深くする。

そして、誰方の作品にも、思い上った姿勢が無い。

強いて難を云えば、ポケットに大きく、鞄に嵩張ることであろう。

失敗を黙って見てるこわい人　克枝
バスの窓一人ひとりの青い空　柳子
気に入らぬ髪で一日落ち着かず　智子
話せる時の母は女の匂いする　君子
白砂よ海の悩みをおわかりか　夕花
さみしいね物に変って行く心　千梢
お母さまと甘える所作も義理を越え　瑞枝
うぶ声は秤の上で天を蹴り　〆女
病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ　芳子
燃えるもの失いパンに生きて憂し　酔夢
炎えること久し尼僧の指の冷え　弥生
問い詰めて女愚かな溝を掘り　千代
心迷えるものに川のすなおなり　葉子

バラエティーに富んだ女流作品群で、ユーモアあり、ペーソスあり、そしてそのいずれの発想にも、善にして可憐なる「女心」がひそんでいる。

ミレーの祈り干拓地が暮れる　緑之助
クレオンの赤が何かを主張する　三林坊
一人静二人静も買いました　久志良
蚤取ってもとの寝息にはやい妻　日満
一列にこちらを恨むメザシの目　甲吉
城番に落葉焚く日々始まりぬ　故葵水
ヴィナスに似てプラタナス腕がなし　宵明
新緑に負けない色を女着る　素身郎
トラブルへ包丁少し錆びている　里風
新聞が来て郵便が来て誰も来ず　久米雄
正面を凝視する子の神に似る　奇童
落ち着かぬ心に香を焚いてみる　恵二朗
無に坐して落葉はひとつずつひびき　千翁
思想とは別日の丸に風みどり　静水

地域的なハンディを乗り越えて活躍する人たちであるが、作品にも目を引くものがあり、地方柳界の指導者としての、風格と年輪を見ることが出来る。

スイスイと思うことなし熱帯魚　生々庵
エスカレーター老若男女湧く如し　栞
管長の色紙和の字が和に見える　多久志
大阪の穴場博多で聞いてくる　形水
伊予絣妻へ撰るのも旅なれや　好郎
用の無い指が性書を離さない　小松園
タンタタンタン朝は港のリズム持つ　水客

大物の包容力というか、悠々迫らず、偉ぶらぬ句風は最も親しめる。

花時計の機械覗いた悔を持つ　新之助
山の峰　山の男が来て飾る　岳人
ここからは他人のはいれない涙　天笑
進む時計遅れる時計夫婦かな　薫風
仏像の金が剝げたら信じよう　鬼遊
かもめから白さ奪ってゆく港　酔々
熊がおじぎしてると人間が思うだけ　一三夫

塔の次代を背負ってゆく、新進気鋭のご精進を祈るや切である。

（49・7・19　於　碧　山　洞）

北川春巣

句集「川柳塔」所感

私は、後れ馳せながら先ず、句集発刊の委員長、生々庵先生をはじめ、その他のスタッフの方々にお礼をいわねばならない。参加同人二五五名、四、五〇〇余句の句集を何日かかって読み終えて、お礼のはがきを書こうとしていた矢先き、編集局からのはがきで、句集について何か書くようにといって来た。私はお礼のはがきは書かず遅くなりついでに、誌上でお礼を述べることにした。

「立派な句集を発刊して頂き、本当に有難うございました。委員のご苦労はいかばかりでしたでしょう。私は、十七年前に、同人句集『私達』発刊の際、責任者として当事者のご苦労を目の前に見て来た経験から、分るような気がするのです。厚く厚くおん礼を申し上げます。」

しかし、同じく同人句集とはいっても、前の「私達」と、今の「川柳塔」とは趣きが違うのである。「私達」には、その背後に路郎先生の選を経ている、という重みがあった。その代り、企画してから発刊までに二年有余の選に要する時間が必要であった。「川柳塔」の場合は、企画発表後一年ほどで、ばたばたとでき上ったという感じである。

それにしても、二五五名もの参加者があったことは見事である。提出された句がすぐに原稿になったという、いわばらくな所があったからかも知れぬが、本を作る労力の方は、昔も今も同じである。しかし本誌六月号の一三夫さんの文章を読むと、必ずしもらくではなかったようで、そのご苦労を知り涙がこぼれるほどであった。「私達」の場合は、参加者は今の約半数の一三六名。各人が原則として路郎選として発表になった句の中から、二〇〇句を自選して提出、その中からまた路郎先生が句主の個性の出た句を再選されたものである。自選句というのは、必ずしもその作者の個性が出ていないうらみがある。その点に注意して「川柳塔」は読まれねばならないと思う。

句集を読んで驚いたことは、先に書いた参加者の多かったことと、その参加者の多くを私が知らなかった、ということであった。この人は、あ、堺の人、あ、東大阪の人、富田林の人、島根の人、愛媛の人、などなどという具合に、後ろの住所録を参照しては、驚いてばかりいた。また参加者二五五名中「私達」と両方に出ている作家は僅かに四五名で、残り二一〇名は、新しい「川柳塔」誌の同人である。そして句はさすがにうまい。（それが個性的であるかどうかは、私には分らないが…）路郎先生もさぞ草葉の陰、いや雲の峰の陰から喜んで下さっていることと思う。

次に句集が路郎忌句会にうまく間に会ったということは、実にすばらしいことであった。もちろん委員の方々のお骨折のお蔭であるが、そのほか私は近頃、因縁ということを深く考えるようになった。人がいくら努力しても、印刷屋で後れたり、悪天候のため運搬できなかったりするというようなこともあり得よう。人間の努力以外の要素が多分にあるのである。それがうまくいったということは、やはり何かの因縁である。第一、この七月七日の先生の祥月命日が、うまく日曜日に当ったということからして、不思議の因縁を

感じるのである。

浜田久米雄

句集について

一三夫さんから句集についてなんでもよいから書くようにと言うて来られた。なんでもよいは余りにも漠然としているので戸惑ってしまった。けれども何か書かねばならぬと思って読んで行き、その中でも特に私の好きな句を取り上げて私はこの句のここが好きだと書いて見ようと思った。

ところが一人十八句は何年にも亙って作られた中から選り抜かれたものだけにみなわかる句でありみな秀句ばかりである。一人の同人から一句取り上げると二五五句にもなり到底このスペースでは無理であることがわかった。スペースの許す句数を十五句としても四、五九〇句の中から取り出すのは到底私の出来ることではないので、なんでもよいからに甘えて句は取り上げぬことにしたのである。

さて同人句集「私達」が出たのが昭和三十二年一月で現役百三十六人と物故者九人で予め各人から二百句迄を提出し路郎先生が一年半かかって精選されたもので人によって句数の多少はあったが刊行された「私達」を見てほんとうに感激したものであった。「川柳塔」は二五五名参加、一人十八句の金字塔は実に堂々として立派なものである。心から発刊をお祝しておよろこびを申し上げたい。

われわれは路郎先生から命ある句を創れと励まされて来た。作者の個性を盛り上げて誰が読んでもよく理解され、そして気品のある句が命ある句だと考えられるが、そのような句はそう簡単に作り上げられるものではない。絶ゆまぬ努力と研鑽を続けているうちについ会心の作が生れ、その人にとって命ある句になるのである。昔から次々と綜合句集や個人句集が発行されているか、もち論その句集に載せられる句は、その人の命ある句であらねばならない。一頁に五句或は十句をならべている句集をよく見受けるのであるが、その何百句を全部読んで行く川柳人がいるのだろうかと疑問が湧いて来るのである。私もそのうちの一人で書棚にならんでいる句集の中で全部読んだのはほとんどないように思われる。

私が昭和三十八年に路郎先生のお骨折りで句集「凡人」を出すことができたのであるがその年の始め先生に相談しに出かけ、ご快諾を得原稿作成に取りかかったが、三十年間の沢山の句の中で、これが私の句でござると見てもらえる句、自信のある句、命ある句にやや近いと思われる句はまあ十句位のものであった。十句では句集にならぬのでその上にまあまあと思える句を九十句足し、全部で百句を一頁に一句載せ、その左に句の思い出や感想を書いてどうやら句集になったのである。

「川柳塔」は「私達」以来十八年間の多くの句の中から自選された十八句であって、必ずやその人にとっては命ある句であるに相違なしと断言せざるを得ない。私は「川柳塔」を時間をかけて読み終り、その人その人の個性を句風を命を玩味したいと思っている。

山内静水

句集あれこれ

学生句集〝竹の子〟は十周年近県大会の記念行事として、一円の寄附もうけず、学生をのぞく会員の手で、B6版、百十六頁、非売品を発刊したのは、七年前の九月の大会だった。当時句集は売れないものとされていたが、内は別だ、小・中・高・大の三十一名からなる学生ばかりの句集だ。必ず売れると、思い込んでいたが、読みが違っていたことを思い知らされた。二百余名の参加者記念品として贈り、別に大口の購入もあったものの（一冊百五十円）三百売る予定もはさっぱり、しかし儲ようなんて思ったことでもな

く、二百冊ぐらい日本全国にばらまき、今では五十冊ほどになり、会の宝として大切に保管している。現在の柳誌代よりも安い〝学生句集〟が売れなかったようでは、一般の句集は売れにくいのがあたりまえかも知れないと思っている。例外はあるが。

現在手元に百冊近い句集をもっているが、進んで求めたものは十冊に満たない。付き合いで買ったものと、会の関係で寄贈を受けたものが大半である。

異色の句集と言えば2センチの細字句集、A6。半紙手書き句集。岐阜の小林法泉氏指導。発行の学生句集〝おたまじゃくし〟原爆句集の三冊がある。

何んと言っても個人、遺句集、次いで合同句集で十冊ぐらいある中でも、全国鉄川柳連盟発行の今回で第十八集に至っては、その情熱たるや抜群と思う。と言って合同句集賛成論者ではないのである。その理由は、毎年毎年発刊される句集に載せる句が、あり余るほどある人もあろうが、反対の人もいると思うからである。こんな句をと自分でも思いながら、付き合いに出句して、わりと高価と思える参加費、その上に遅刊など等々、毎年行事は考える余地はなかろうかと思う。

このたび川柳塔社創立十周年を記念して発刊された、合同句集に就いては機を得たものであり、同人の一人としてよろこんでいる。私が本社同人に迎えられて日も浅く、十二年であるが以来初の企画であり双手をあげて参加した。発行も大会当日ピシャリ。あの布表紙の感触、色彩は頁をくるまでもなく、温いものを感じた。淋しかったのは参加されるべき作家の作品のなかったことである。

「製本の断裁で下部を5ミリも広くされ、これにはちょっと、ショックでした」と不二田一三夫氏の便りで、まことにも思いながらも身ひいきかも知れないが、近来にない立派な句集にして貰ったと、関係者に感謝している。

終りに、かりにも句集に誤字、脱字があってはならない。義理人情でなく、柳人一般人を問わず広くから求められる句集でなければと思う。

（盲言多謝）

尼緑之助

川柳塔人の気魄

どんな名句であっても、たった一句では「真」にふれがたい。真を掴んだとしても、偉大な文学としての評価は無理だ。

芭蕉にしたところで、一句ずつバラバラにしたら、俳聖としての評価を得られない。一句だけで世に問う——これは博士論文にならないっ

一句だけなら無意味だというのではない。一句は一句なりの生命を持ち、意義は申上げるまでもない。私の言いたいことは、やはり五句より、十句、その作者のより多数の句を並べて鑑賞することによって、句をより早く、より深く捉えることが出来る、ということにある。

この筆法でいくと「川柳塔」の人達が全員、全作品を収めた句集を提示したらよい、ということになるが、これでは全部目を通すことに骨が折れる。遂に読まない句集さえあるということにもなりかねない。

従来年鑑句集のように、一人十句程度のものは相当数拝見しているが、「川柳塔」の十八句は手頃な鑑賞範囲だと思った。

扨、内容だが、通覧したものの、批判するだけの準備不充分でもあり、一応省略させていただく。

勿論自選だから、個の主張が盛られ、作者各々の味に接することが出来、句を、人を、見直した「おどろき」と感激を覚えたことである。

若い人、中年、老境、女性、或は保守革新、何れの場合においても「持ち味」というものを深く考えさせられた。これは個人句集とは全く別の趣きを持っている。

編集者の方では、体裁とか、組み方等に不

満があったようだが、これは小事だ。装幀にしても、いみじくも「川柳塔」らしい、落ちつき、素朴、真実感があふれている。収録された二五五人の作品が悉くダイヤだとは言えないにしても「川柳塔」に打ち込んだ作家達が、身体をぶっつけた「句集」正に時を得た金字塔だ。

藤井明朗

初心に還って

川柳塔創立十年（川柳雑誌通刊五六六号）を記念して、同人句集発刊記念大会が七月七日大阪府教育会館新館に於いて開催、しかも二四〇余名の出席を得た事は躍進川柳塔を讃えてくれた。

十年の結集をここに句集として刊行。見事な秀吟揃い。後世へ残す一つの財産として思い出になる。さすが選りすぐった句に接し、川柳の陶酔境に誘われる余情尽きぬ人世の詩を満喫しつついるのである。

「川柳雑誌」時代から二十年、同人の席を汚している私ではあるが、前進のないまま今日に至っている。この句集をお手本に初心に還っての勉強をする決意を新たにするものである。

変身の早さ世相へ負けられず　明朗

追えば逃げる幸せを諦めず　同

伊藤茶仏

読み手には満点

個人句集が氾濫する中で自分の句集を持たない私は次ぎつぎに発刊される句集を出来る限り眼を通すことで諦めに近い実感を味わっている。

何はともあれ、句集は多くの人に鑑賞され共感を得るものでなければ発刊の意義はない、装幀もさることながら、頁をめくると糊がとれたり、とじ糸が切れるなど一読してバタバタになるような製本はいただけない。

同人自選句集「川柳塔」はその点流石である、表紙の手触りとやわらか味が読み手にとって満点である。

自選一人十八句を二頁に配列した編集の手際よさも心憎いまでの老練そのものである。

私のように個人句集の刊行がおぼつかない者にとって、ありがたい極みである。

川柳塔社のみなさんに厚くお礼申上げたい。

私は昨年から「大和善隣館三十年の歩み」を企画し本年六月三十周年記念式典にさいし関係の方々に頒布した経験から狂乱物価の折予算その他で苦労した実感は、句集刊行に、大変な気苦労があったことを他人事にはすまされない、合掌して重ねてお礼を申し上げます。

麻生路郎選集「私達」と昭和三十二年度の川柳雑誌の合本を書棚から取り出して再読し当時の追憶を新たにし感慨無量のひとときをすごしました。

「私達」は一年有半を選句に費やされた先生の在りし日を偲び「私達」発刊祝賀会の末席につながった意義を噛みしめたことでした。

七月一日からオープンした小松市老人福祉センター千松閣の経営を委託され、何分にも未経験で人事その他多忙をきわめ、まとまったものをと念じながら、つい雑事に流されて大変失礼を致しました。いづれ稿を更め十月号にでも間にあえばと存じます。

河村日満

狂乱経済の中で

ところで今回私に与えられた課題は「句集

について」。ただし内容はなんでも結構というものである。早速大阪の十周年記念会場でいただいたきり、忙がしさのために本箱にしまい込んだままになっている同人句集「川柳塔」をあらためて拝見する。会場でいただいたときも「こりゃ見事だ。」とおもったことだったが、なんといってもまず表紙が好きだ。

私が持っている「川柳雑俳集」の表紙も濃紺に金文字であしらってあるが、「川柳塔」のは文字も太く、しかも間隔をおいてのトレードマークの位置が、落款印章のそれに似てぴたっと生きた感じで、全く見事な出来だとおもっている。

ところで云い忘れてはならないことは、やはりこの句集刊行のために物資的、経済的な面を含めて、全力を傾注していただいた係の皆さんに対しての感謝であろう。「それから八カ月、経済の狂乱に見舞われ、二転三転しまして、」と跋で西尾栞氏が簡単に書かれているが、私達自身が体験したように、何もかにもが無い無いづくしの狂乱だったことを思えば、その苦労のほどが充分に身に泌みるところで、係の皆さん方にあらためて深く感謝を捧げるところである。

さて次は、句集の内容は、ということになるのだが、各人の句については自選句ということなので、私はここでは触れることをさけるが、一つ嬉しいことはどの頁を繰ってみても「よく判る句」がいっぱいで、「川柳塔社」というものをよく表わしているとおもうのだがどうであろう。

最後に、句集「私達」を刊行された故路郎先生が序の中で「……斯うした歴史的存在を誇る川柳不朽洞会だから、今回会員諸氏の名吟佳什を蒐め、その真価を弘く世に問うことは寔に意義深いものと信ずる。」と述べられているのであるが、折角の句集「私達」の刊行にも残念乍ら何名かの、いや正確に云えば八九名という多数の会員が参加を見送っておられる。今回川柳塔改題当時の同人で、この句集刊行に参加している同人は一二六名で、参加しておられない同人は七六名もおられる。若い同人諸氏なら、又、という機会もあろうかとおもうが、三年五年のうちに再びこのような立派な句集が刊行されるとは思われない今日、せめて改題当時からの同人諸氏くらいには、是非ともこの句集「川柳塔」に全員が参加してほしかった、と惜しむことしきりである。

定金冬二

自分の背が叩けるか

同人句集「川柳塔」の感想を、賞めるもよし、批判もよしで卒直に原稿紙3枚に書けという。3枚ではどうにもならないので、賞める方は他の人に任せて、ぼくは批判という態度で感じた事をすこし書いてみたい。

ご批判ください、残部が百冊ほどあります。

川柳塔社
同人句集
『川柳塔』
価 一、五〇〇円
送 一一〇円

東野大八氏—立派な布張りの豪冊ぶりに愕きました。
岡田 甫氏—意外にも新鮮な句が多い。堂々たるものです。

発行所 〒542 大阪市南区鰻谷仲之町二〇 川柳塔社
(振替口座 大阪・三三三六八番)

「あれから十年の歳月が流れた。その間の道は、私どもにとって必ずしも平坦ではなかった」という生々庵の序文の一節と、「ともあれ、おこがましくも、江湖に問う句集、後人に贈る句集が」という跋文の栞の言葉を、心の底に沈めながら、卒直に書いてみたい。

川柳塔社の異色作家といえば橘高薫風の名がすぐ浮かぶ。その作風は清潔で、人間の心の痛み、といったようなものが作品の底を流れていて、それが魅力にもなっている。けれどもぼくは、もっと線の太い野性的な作品を時には見せて欲しいと思っているのである。

○ 少年の幾人いても毬一つ　薫風

薫風作品を異色だと言う。又は言われるところに、川柳塔調？ の悲劇があるように思えるし、また逆の立場から言えば、他の人々の作品の流れが安定しているのだとも言えそうである。

いくら大きなプールでも、何百人の人が長い間泳いでいると、いつかは水が濁る。だがプールの中に居ると、案外その濁りが解らない。そこで、客観的にプールを見つめられる人が必要になってくるのである。

高杉鬼遊、香川酔々の二人に、ぼくは期待しているのである。他社の句会に出席して、自分を見つめているようだし、作品もそれぞれよい味を持っている。後は二人の覚悟次第という事になろう。

○ 仏像の金が剝げたら信じよう　鬼遊

○ 矢の跡が胸に残っている　埴輪　酔々

ぼくは欲張りだから、255人の出句者があるのなら、255の個性が欲しいのである。あまりにも日常茶飯事的な物の中で、何の不安もなく、句を書いている。そう思えて仕方がない。もっと「疑問」を持っべきである。

我々のまわりに、これで良い、と安心出来る物はない。川柳が「人間陶冶の詩」というのであれば、もっと厳しい、そして冷静な心構えが必要ではないだろうか。

作家は常に、自分を冷静な瞳で観察できるもう1人の自分を持つべきである。そして、2人の自分の闘いの間から、作品が生れてくるのだ。とぼくは思っている。（文中敬称略）

こころに触れた作品

○腕時計はずせば枷の音がする　新之助
○神さまを味方に今日も負けている　千代香
○棺覆うとき最も星条旗らしい　史好
○ターミナル一期一会の群ならず　滋雀
○これ心王者の如く歩ゆませよ　野迷路
○こおろぎよ何うろたえて我が膝に　阿茶
○ねぎ坊主どこかで星の子が生まれ　素郎
○掌に花芯を残し人遠し　葉子

★

▼吉田圭井堂氏から―同人句集の氏の作品第二句目を〝呑舟の魚は疎で洩れ密で洩れ〟と訂正申込みがありました。

通信（A）

池口呑歩

前号の圧巻は何と云っても、〈原爆許すまじ〉の特集です。

原田明春氏の玉稿は、被爆当時長崎にはいらっしゃらなかったとの事ですが、詳細なデーターを駆使せられて感動的で、資料としても実に貴重な文献となっているようです。

俳句は自然―川柳は社会―等と云いながら今回の貴誌特集の如く、社会性あるものに冷淡な川柳界の現状は、やはり考えるべき問題のように愚考され、その意味で、貴誌の前向きの姿勢に脱帽させられます。（川柳年鑑編集委員）

通信（B）

小泉戸牟

原爆日にあたり、特集「原爆許すまじ」をかみしめて拝読しました。（西日本新聞社編集局）

柳神を目指して

直原七面山

川柳塔七月号の〝一分間の柳論〟で本田恵二朗氏は〝川柳界に入門したことは柳縁であり、作句に精進することは柳魂であり、やがて安定した作句活動が出来るほどになるならそれは柳恩である〟と申されていますが、私は全くその通りだと思います。

が然しながら私は、今一歩それらを押し進めて卓絶した〝柳眼〟を養い、心技をより美しく磨きあげて柳友達から〝彼こそは柳聖だ〟とこう呼ばれるとともに、なおその柳聖の域に甘んじとどまることなく、一層も二層もより深く〝川柳学〟〝選者学〟を学び、その神秘のヴェールに包まれた〝川柳の奥義〟を看破し極めつくして〝本当にあの人は柳神である〟と崇められるところまで、精神努力を積み重ねて行きたいと思っております。

故麻生路郎先生は、その生前においてすでに〝柳神〟とまではゆかなくとも、少くとも〝柳聖〟の域には到達されておられたのではないでしょうか。

その証として私は師の辞世の句とも言われている

〝雲の峰という手もあり

さらばさらばです〟

の一句を挙げたいと思います。名句ではございませんか。

ともあれ私達川柳人は、その誰れ彼れをとわず、ひとたびこの道に入ったからには、あの偉大であった路郎師の屍を（師もそれを望んでおられることと思いますが）乗り越えて、一日も早く〝柳神〟の名誉を獲得されますよう日夜川柳道にいそしんで頂きたいと思います。

之れが弟子達の、孫弟子達の〝師恩〟に報いる唯一無二の道でもあるのですから……。

★

東大阪市文化祭参加

川柳東大阪・第二回川柳大会

日時　十月十日（祭）
正午開場。出句締切一時半。

会場　東大阪市中央公民館二階
視聴覚教室

講演　川柳塔社副理事長　川村好郎氏

兼題　【雅号イロハ順】
（題）
ポスト
帰る
声
祭礼
革新
名

（選者）
久保田以兆氏
礒野いさむ氏
北川春巣氏
永田帆船氏
榎本聡夢氏
橋高薫風氏
戸田古方氏
亀山恭太氏

席題　二題（題と選者は当日発表）

会費　三百円也（呈、記念品及び大会句報）

賞　各題、最優秀句には東大阪市長、その他の賞状及び副賞贈呈。

出句　出席者に限る（各題二句以内）

主催―東大阪市文化連盟
東大阪川柳同好会
後援―東大阪市
東大阪市教育委員会

★

ちょっと一筆

河原みのる

七月号古方先生筆、路郎師、おもい出中「遺髪をつぐ」の字句が二度ありますが、あれは「衣鉢」（えはつ）ともよむのではありますまいか。もし私が間違っていれば御許し下さい。さもなくば多久志先生の「年々歳々……」のように御訂正希います。

★

50年版「川柳年鑑・公募作品」一人一句。応募句は「人生」「社会」「自然」の三類に大別される。選者は（人生）岸田万彩郎・太田黒花籌・他一名（社会）藤島茶六・西村九千坊・他一名（自然）鈴木九葉・佐々木福郎・他一名）**10月10日までに川柳塔編集部へ。**

百人一首と川柳（3）

富士野藜馬

三　柿本人麿

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
　ながながし夜を独りかも寝む
（拾遺集）

この前も次も「白妙」が詠まれてあるので

白妙の中へ山鳥おりる也　窓梅（二七19）

と川柳に詠まれている。柿本を、

人丸のめうじへさほを持て来る　狐声（三一21）

と柿の木にたとえ、また柿の木の股から生れたという俗説があるので、

九十九人は親の腹からうまれ　（二四22）

九十九人は人間の穴から出　清屋（八〇35）

という戯作もある。

山鳥は寝て詠み島は起きて詠み　文志（一の六38）

という川柳がある。これは同じ人丸の歌、

ほのぼのと明石の浦の朝霧に
　島がくれゆく船をしぞ思ふ

が、早起きをするマジナイに唱えられるので、それと「独りかも寝む」の歌とを対照にして詠んだ句である。

この「ほのぼの」のマジナイの歌については多くの川柳が詠まれている。

夕べにはきり翌には舟と言　（三〇20）

人丸を片身おろしてあすの朝　（拾五8）

寝る前に上の句を三度唱え、起きて下の句を三度唱える。

人麿は枕時計を世に残し　斗丸（五四15）

さめるのは本歌ねむるは子守唄　留人（五五15）

ほのぼのの鏡うれしい顔つくり　三交（二九27）

ほのぼのに明石も須磨も作り立て　鳳頭（二八3）

翌ス芝居奥は明石の浦に寝る　青露（五八26）

人丸を枕時計に奥でする　霞朝（二九28）

百人の中に目あかし一人居る　（一九11）

人丸も菅家も人の目をあかせ　竹子（四六33）

人丸にはぢをかかせるねごい事　五楽（俤五28）

等々、なお、

ほのぼのに出て足曳の花もどり　カノコ（八四32）

ほのぼのと人丸堂を矢の如し　（九1）

人丸の宮に稲田は尻を向け　赤子（一六二18）

稲田が領地へかくれ行を惜み　雨譚（筥初15）

などとも詠まれている。須磨の人丸社の前方に見える淡路島は、蜂須賀侯の家老稲田九郎兵衛の領地であった。

柿本人麿は、持統、文武両帝に仕え、官位は高くはなかったが、宮廷歌人として重んぜ

られ、「古今集」の序文中に「柿本人麿なむ、歌のひじりなりける」と貫之が書いている。「万葉集」の歌風を代表するものであった。三十六歌仙の一人である。晩年に石見へ赴きその地でなくなった。

本歌の文句取りに

ひとりかもねんなぎさこぐ朝の猪牙　魚交（一〇〇20）

四　山辺赤人

田子の浦にうち出でて見ればしろたへの
ふじのたかねに雪はふりつつ　（新古今集）

「万葉集」には

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ
不尽の高嶺に雪はふりける

とある。それを「新古今集」の選者定家などが、新風に改めて載せたのである。

赤人を白妙にした新古今　早川（八二32）

と川柳にも詠まれている。

「古今集」の序文中に、

「人麻呂は赤人が上に立たんこと難く、赤人は人麻呂が下に立たんこと難くなん有りける」

と貫之が書いているので、

赤人はしぶしぶ柿の下に立ち　草人（四九35）

猿丸の尻に赤人立たん事　木賀（八二8）

と川柳になっている。

また歌の文句にかけて、

うち出て見るに及ばぬするが丁　マイタ（五三2）

四人目は三国一の御歌なり　煙幸（五六28）

ふじの歌山のほとりの人がよみ　（一二12）

赤い人だけに白きをほめつくし　鷺舟（六七22）

田子の浦白きをほめる赤い人　真垣（七九4）

などと詠まれ、前と次の歌にかけて、

高根の左右山鳥や鹿が鳴　五蝶（六二19）

打ち出て見れば左右に鳥と鹿　花一（七三4）

奥山と香久山の間不二の山　杜蝶（七六11）

不二と田子越て赤人足を曳き　株木（九六28）

と戯作されている。

不二山を地引にかける田子の浦　藤丸（五四4）

高根より見おろす田子の浦穂波　竹成（一一二33）

と文句取りに作り、

歌かるた富士の高根を手で押へ　（武十八14）

雪の手で冨士の高根を嫁はとり　丸竜（一五〇6）

と歌カルタ取りにも詠まれている。

山辺赤人は、人麿より後、元正、聖武両帝に仕え、諸国へ旅したようであるが、その伝はわからない。作歌年次は天平八年（七三六）までである。三十六歌仙に入れられ、和歌三聖の一人である。その赤人の歌、

夜やさむきころもやうすきかたそぎの
ゆきあひの間より霜やおくらん　（新古今集）

―かたそぎは神殿の千木―

が広く知られていたので、その文句取りの川柳が作られている。

夜やさむき衣やうすき居候　雨夕（三五41）

夜や寒き衣やうすきたふれもの　（拾四21）

夜や寒し衣や薄し濁り酒　虎同（二八5）

夜や寒きとは傾城のねだりごと　（拾五1）

夜や寒きとて片そぎの箱を抱き　杜蝶（九六11）

地震

木村弥栄子選

机上では地震に負けぬビルが建ち　茶人
地震にも気付かぬ眠りの顔洗う　同
揺れ方によって出ようか残ろうか　ろ亭
女性と云う意識忘れていた地震　保夫
地震予知地下の鯰に笑われる　翁童
地震国忘れて地下を掘りまくり　バット
震度2へ手の抜いた家が揺れ　素身郎
日本列島平和地震の危機秘めて　同
物価高地震雷火事を敷き　千翁
本当の心を送る震災地　白水
幸福は耐震帯の過疎に住む　同
地震後のあばら屋ダンプにもおびえ　無人
明けがたの地震を知らずひやかされ　同
訓練だから笑顔も出来る震度6　かつみ
軽震に笑い合ってるあわてよう　同
スロモーは地震止ってから慌わて　伶人
地震予言へ干物売り切れる　魚山
竹藪へ逃げた昔の地震談　古方
あの地震から無情知りはじめ　祥月
強震にあわてて進路ふと迷う　不二
一日ずつ地震のこわさ又忘れ　重人
マイホーム地震が怖いローンです　同
もめているふたりを地震仲裁し　同
全壊の後に見つけた無事な顔　豊生
大地震揺る信じるものを覆えす　どんたく洋々
地震からこっち湯の湧く里になり　同
ガード下に住んで地震と気が付かず　本蔭棒
高架下年中無休の震度三　同
乱世を諫める地震かも知れず　英詩
被災地へ首うなだれる地震計　同
温泉を汲み上げ過ぎて地震呼び　神田秀峰
子供部屋地震のような音がする　松高秀峰
地震火事うちはまさかと思う日々　貞祐
地震何度あっても此処に住み　一郎
安普請いつも弱震ぐらい揺れ　一風
震度2を誰も知らない合宿所　宵明
地震予知おかまいなしに建つ家並　竹馬
電灯の傘に地震をたしかめる　洛酔
浮き足を立たせて地震すっと逃げ　同
ビルへ来て感度が鈍った地震計　弘生
ゆり返し待つ間に元栓しめにゆき　同
爪跡が示す地震のエネルギー　右近
溢れる湯過去の地震の置き土産　右近
女湯の地震漫画として残り　国彦
子の夢に怪獣がいる震源地　英詩
予想した地震の時刻やっと過ぎ　不二
真夜中の地震夢路を追っていた　祥月
そういえば揺ったようだと高架下　弘生
復興へ地震の地図は拡げられ　いわを
余震がつづく大きな握りめし　雀踊子

雷

蔵本白梅子選

雷が過ぎて庭木が活きかえり　道子
雷をひやかすようなビキニなり　伶人
雷が落ちた気配の社長室　バット
雷が二死満塁を止めさせる　秀峰
雷へ今は逃げこむ蚊帳がない　本蔭棒
大雷雨に逢うて断る夏の旅　古方
梅雨明けの山に雷夏を告げ　洛酔
梅雨の幕雷太鼓叩いてる　どんたく雀踊子
雷はイヤジャイヤジャと避雷針　ろ亭
越中の雷能登は晴れており　春日
春雷が鯛を瀬戸に呼び寄せる　一郎
雷に仲立ちされた夫婦です　右近
遠雷に負けじと祭太鼓打ち　素身郎
雷に明治生れは「さん」をつけ　踏草
雷と語るフランクリンの凧　竹馬
母方の遺伝雷アレルギー　凡九郎
女の雷さんやろかまだまだ鳴ってはる　祥月
雷と雨のコーラス聞く平和　木魚
雷が止んで稲田を見に廻り　紫宏
雷の恐くない子が威張ってる　洋々
稲妻は不倫の愛も見て走り　英詩
ごめんねと雷虹を置いて去り　章雅
精気ひとしお残し雷雲去る　七面山
雷へ蟹は怒りの爪を挙げ

雷にお断りしてヘソを出し　同
地下鉄を出ると雷雨の過ぎた街　一風
雷が去ってカップル小屋から出　度
雷に不意を突かれた夜店の灯　福水
東京だちょっと雷門覗く　正彰
雷鳴を聞くさまざまな胆っ玉　千翁
遠雷をたぐり寄せたい渇水地　白水
雷鳴りへドラマのように寄って来ず　宵明
雷を土産に夕立峯を越え　里風
雷が夜市の客を追いちらし　真奇
夕立に雷そえて芸術や　古方
補聴器をはずし雷遠く聞く　無人
雷を落して欲しい父がない　白水
押売りの尻が雷さんで浮き　千翁
雷の近きに父といる安堵　英詩
雷が鳴って心の梅雨明ける　正彰
遠雷を聞いてキャンプの子を案じ　軸

火事

月原宵明選

遠い火事見ただけ又も寝てしまい　暁風
出火現場が判らず消防車があわて　七面山
類焼をまぬがれた店半開き　松花
風向きで助かり保険に加入する　弘生
サイレンをうつつにきいてる遠い火事　雀踊子
近火見舞市議が一番先に来る　弘生
ちぐはぐな服で来ている火事見舞　綾女
類焼で私の名前が出たニュース　正彰
エリートが役に立たない社の火災　素身郎
火事見舞小さい恩を恩として　暁童
火事消えて間もなく強い俄雨　右近
焼跡に金庫ポツンとだけ残り　暁風
火事場からやっと出したを盗まれる　バット
ビル火災弱点ばかり火が走り　無人
山火事のみちからはずれ百合の咲く　古方
銀行も名刺を持って走る火事　木魚
火事のない平和消防士の午睡　重人
ゆきずりの火事を写して賞を受け　肖二
戦火越え弥陀は慈顔を失わず　どんたく
船体を二つに折って焼えつきる　伊津志
弥次馬も気が進まない夏の火事　本蔭棒
消防車よりも弥次馬先に着き　春日
夜の火事その方角に住む知人　雀踊子
類焼のせめて身の置き所あり　千翁
風向きで火事見物をあわてさせ　秀峰
ビヤガーデンわが家に遠い火の手みる　英詩
火事だけは出ずなとおやじ言い残し　敏
焼跡へ刑事としての目が光り　重人
保険切れとたんに隣から出火　竹馬
焼残りの柱に貼った火事の礼　国彦
なま焼けで消して保険へ怨まれる　みのる
サイレンへうちの元栓締め直し　洋々
火事見舞何度掛けても話中　一風
臨月の嫁に見させぬ夜の火事　古心
問合す火事に有線みな塞ぎ　代仕男
まだ夢にB29の火の饗宴　どんたく
火事現場非情のマイク突きつける　白水
火事見舞濡れた不足を聞かされる　綾女
風向きが変って一軒焼け残り　洋々
火事見たらあかんと身重叱られる　本蔭棒
知っているビルがテレビで焼けている　豊生
昼の火事忘れたように虫の声　暁明
弥次馬の出過ぎポースの霧に濡れ　軸

初歩教室

題 ―「旅」―

本田恵二朗

缶ビールまた転がして一人旅　誓二
子のプラン通り金婚旅を発ち　同
（子にプラン貰うて金婚旅に発ち）
鈍行の旅へ蝶々が迷い込み　洛酔
車窓一杯汐の香入れてひた走る　同
雨の旅車窓に見えぬ富士を描き　無人
（見えぬ富士瞼に描いて雨の旅）
旅帰り茶漬と寝床せきたてる　同
（旅帰りそれお茶漬だそれ寝床）
うろちょろと夫の後について旅　慶彦
駅弁でちびりちびりと独り旅　同
改札を斜めに通る旅みやげ　利美
無駄使いして思い出に残る旅　同
（二句共に上出来だ。精進あれ）
藁屋根をバックに酋長さんと並び　三十四
やれやれと家に帰った旅疲れ　同
（旅帰りやれやれやれと脱ぎ捨てる）
妻の目が追って来そうな旅の宿　本蔭棒
生徒には旅情どころか古都の雨　同
（生徒達の旅情をこわす古都の雨）
仏像が呼んでいるから旅に出る　度
禅僧になったつもりの一人旅　同
日本地図区切って今年の旅に出る　善之祐
雲流れ川流れいて一人旅
（独りゆく旅へ雲あり川があり）
絶景も眠ったままの一人旅　宗義
銀婚の旅へ娘が指図する　同
雨の日のことはプランにない旅路　カズエ
土産物いれる袋を二つ買い　同
旅は佳し太古の冷えの竜河洞　貞祐
旅の宵荷物にならぬ土産選る　同
お土産を迷って浴衣の旅の夜　翁童
（お土産を迷いに迷う宿浴衣）
旅情かきたて汐ざいの押し寄せる　同
（汐ざいがうれしく旅情かきたてる）
ハプニングありそうだから旅が好き　静泉
居酒屋を探して旅情あたためる　同
独り旅影とぼとぼとついてくる　同
病人に旅の疲れをいたわられ　伊津志
しみじみと囁きかける旅の星　同
旅よりもうちの茶漬が美味母　サヨ
（旅の宿老母お茶漬をこいしがり）
観て食べてあなたまかせのバスの旅　呑歩利
ふるさとの駅の小さし旅終る　露杖
一人寝の静寂眠れぬ旅の宿　同
（一人寝の寂しさ知った旅の宿）
苦しさを楽しみと知る旅の味　頼次
重荷負って旅する心たくましい　同
（重荷負って旅する心くじけまい）
人生は月日がものす旅日記　大成
年金でうちにもできた旅マニア　同
方向音痴旅のネオンに招かれる　かつみ
（方向音痴旅の紅い灯見落さず）
ゆっくりと湯気にとけてる旅愁　同
（ほのぼのと湯気にとけてる旅ごころ）
非常口たしかめ旅を浅く寝る　同
団体でまとめて捨てる旅の恥　竹馬
独り旅句帖と写生帖友に連れ　同
（旅のどかスケッチブックと句帖連れ）
戦死者に済まぬ結構旅ブーム　静子
（靖国の神に済まない旅ブーム）
日を重ね旅行鞄の重くなり　幸生
（長旅の鞄そろそろ重くなり）

路郎句碑建立25周年
第26回西日本川柳大会　ご出席の方へ！

とき　九月八日
ところ　岡山県久米郡久米南町・中央公民館
――**出発九月七日**。新大阪発9時27分（ひかり1号・指定席）岡山着10時25分。
岡山駅前発10時50分（瀬戸内ゴールデンコース）倉敷考古館。
倉敷民芸館―鷲羽山スカイライン・パークセンター（昼食）―鷲羽山―玉子岳―渋川海岸―玉野荘着。
九月八日。玉野荘発9時（貸切りマイクロバス）弓削公民館前10時着。
―弓削発16時31分（津山線）岡山着17時28分―岡山発17時45分（ひかり44号・グリーン指定）新大阪着18時53分（会費一万円・申込金三千円・定員30名・**申込みは直接岳人まで**）

旅なれているから持つのは週刊誌　保　夫
（週刊誌だけの身軽さ旅慣れる）
新幹線の旅でまことにあっけなし　同
（新幹線旅をあっけないものにする）
旅先に恥を捨て捨てエゴが行く　藤　持
旅に出て細道来れば詩が生れ　同
（あてもない旅の小道で詩を拾い）
民宿で土地の香りを膳にのせ　陽　山
（民宿の膳に土地の香匂いたち）
旅土産自己満足を重くさげ　茂　美
お日もよろしうて今夜は布哇の初夜ですな　静観堂
（お日柄もよろしく布哇の初夜へ発ち）
フォーク使った玉子豆腐は旅のもの　同
妻の城抜け出しホッとしてる旅　比呂路
外遊の土産にメイドインジャパン　同
銀婚の旅でも酒の介抱し　道　子
方言を素直に聞いた旅の窓　同
（方言を素直に聞くも旅なれや）
（旅は佳し土地の訛りを温う聞く）
信濃路や遠く旅して浅間山　つ　た
（はるけくも浅間のけむに迎えられ）
芭蕉行く旅寝の夢は木曽の宿　同
（ほのぼのと芭蕉を偲ぶ木曽の旅）
旅に来て聞くほととぎす夢のよう　同
旅枕心うきうき笑い顔　駒　子
（うきうきと笑顔が揃う旅枕）
駅弁を二人で分け合う旅の味　ますえ
（駅弁を分け合う旅の味のよさ）
旅先で方言聞いて話し合い　生　仏
（旅楽し方言真似て談はずむ）
（方言へ心がなごむ旅ごろも）
年金が支える余生の気まま旅　軒太楼
恥かきに出た旅だからうまが合い　同
年一度夫婦連れ立つ旅の宿　喜　洸
（年一度おしどり旅で若返り）
方言で団体旅行語り合う　同
（にぎやかに団体さんの国なまり）
朝寝坊が今日は早起き旅に出る　秀　村
（朝寝坊め旅ならこんなに早く起き）
旅先の方言土産にいそいそと　濁　水
（方言を土産にする気書きとめる）
旅に出て別な自分を見つけ出し　満津子
（旅うれし別な自分をふと見つけ）
朝風呂と据膳だけは旅のよさ　繁　子
（旅のよさ朝湯据膳に見つけたり）
老いの足いたわり合うて小さい旅　つ　ね
旅たのし見知らぬ人の情うけ　同
（美しい情を旅路で拾い当て）
旅支度母手伝えば荷がふえる　寿美子
お土産を買いに来たよな旅でした　同
脛に傷旅の話をしたがらず　同
（脛に傷あるらし旅の語をにごす）

題―長―九月二十日締切（十一月号発表）
宛先　倉敷市下津井一―九―三四〒七一一
本田恵二朗

路郎句碑建立25周年
久米南町中央公民館新築　記念

第26回西日本川柳大会

とき　九月八日（日）午前八時開催。
ところ　岡山県久米郡久米南町下弓削（久米南町中央公民館大ホール）
兼題と選者（席題三題当日発表）
「似る」　中島生々庵　選
「広場」　三条東洋樹　選
「川」　柴田午朗　選
「妻」　大森風来子　選
「ふるさと」　丸山弓削平　選
柳話　川村好郎
―投句各題二句以内。タテ22センチ、ヨコ4センチの句笺に一句ずつ明記、裏面に雅号、八月末日までに〒七〇九―三六岡山県久米郡久米南町弓削川柳社宛。出席者は当日午前十時三十分まで受付。
会費　出席五百円（発表誌、記念品呈）投句は三百円（発表誌呈）
呈賞　県知事賞ほか（出席者優先）
特別課題「雲」（**よみこみ不可**）**麻生葭乃選**
秀吟にトロフィー贈呈。
▼応募は3句以内をハガキに楷書、無記名清記で選をします。
▼特別課題の締切は七月末日、発表は大会当日。（宛先は前記）
▼特別課題の投句は無料。大会欠席者で発表誌入用の方は三百円別送のこと。
主催　弓削川柳社

第二百七十八回（四十九年度第八回）

大萬川柳「あなた」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　五百二十三句
入選　四十五句

私からあなたを取れば0となり　八尾　夕花
夢は子にあなたはお金を運ぶ役　堺　一舟
あなたさえよければなどと気をもたせ　堺　天笑
香たいてあなたと呼んで満ちたりる　大阪　あいき
あなたからあんた夫権が少し落ち　大阪　十止庵
君の涙を僕の涙にして愛す　松江　晃男
ねえあなたあとの言葉が恐ろしい　新見　落猿
喪服着てあなたの愛の深さ知る　倉敷　梁水
墓参りいつかあなたと住むところ　鳥取　豊生
羅針盤あなたを愛してから狂い　岡山　千代香
肩巾を信ずわたしのあなたです　倉敷　千翁
憎しみと愛の交叉にあるあなた　今治　宵明
上段に妻があなたと切りにくる　岡山　洋之
好き好き好きそんなあなたが憎らしい　松原　重人
助手席であなた任せの瞳をつむり　大阪　文秋
あなたが父ちゃんとなり放っとかれ　神戸　どんたく
あなたならどうする日本沈没論　松江　登美也
あなたにさえ逢えれば乾く涙です　倉敷　素身郎
朱を入れてあなたと並ぶ座が温い　倉敷　白水
愛一途あなたに逢える紅を引き　呉　英詩
青写真あなたの夢に歩を合せ　西宮　百酒
寝返りを打てばあなたが居る安堵　大阪　智子
喜劇かもあなたと私のコマ廻る　富田林　花梢
ふたありになれば貴方に肩がこる　富田林　維久子
どの色を塗ろうあなたにかける虹　兵庫　可住
あなたお休みなさいで終る仏の間　宝塚　静馬
七人の敵から帰る君の膝　大阪　柳信
君を知りわたしを知ってくれた雨　岡山　宗義
あなたからどうぞどうぞとお茶の席　和歌山　武雄
あなたパパおじいちゃんになりけむたがれ　守口　笑風
信号は無視して通るあなたと居　広島　とし
ひと押しが出来ぬあなたのじれったさ　地ノ句
何もかも許してあなたと言えぬ人　天ノ句
あなたには解ってほしい目をむける　人ノ句
許す気の隙をあなたは気がつかず　信号の赤があなたの貌となる
お診断はあなたが待っていた徴候　今治　宵明
美しき誤算でよいあなたなら　未来図はあなたを中心にして廻り
あなたとも呼べない距離行く空の旅　八尾　弥生
熱海からあなたあなたとこき使い　堺　一二三
オイコラのあなたを御している私　松原　重人
アミダさんあなたまかせを聞きあきる　大阪　弘生
君慕う涙へ空似多すぎて　和歌山　武雄
ご機嫌の妻にあなたと呼ばれた日　守口　笑風
過去などは問わぬあなたが妬いている　広島　とし
嬉しい事続いてあなたをなお悼む　和歌山　としを

第17回 近県川柳大会

日　時　9月1日（日）　受付9時より
出句締切り12時

会　場　竹原福祉会館
駅より歩いて2・3分
閉会予定16時

兼　題　友、港、机、血、嘘、
力、雨、鏡、道
以上9題　各2句 吐

特別課題　当日1題

会　費　500円（発表誌、軽食ふくむ）

表　彰　広島県知事杯、学生賞ほか
20位まで贈賞

投句締切　8月25日まで
用紙は巾4㎝長19㎝裏面に雅号
明記の上 300円（切手代用）同
封されて
〒725 竹原市竹原町田中
山内静水あて
電 話 08462 ② 4554

主　催　たけはら川柳会

何を選んでいたゞくか
は先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのも　心に
くい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

選者吟

策尽きた時だけあなたまかせなり

昭和四十九年度
ベストテン（七月現在）

一　**花梢**　一六、〇　富田林
二　**天笑**　一五、〇　堺
三　**梁水**　一二、五　倉敷
四　**弥生**　一二、五　八尾
五　**宵明**　一二、五　今治
六　**可住**　一二、〇　兵庫
七　**十止庵**　一二、〇　大阪
八　**文秋**　一一、五　大阪
九　**静馬**　一一、〇　宝塚
一〇　**重人**　一〇、五　松原
一一　暁明　一〇、五　大洲
一二　つき子　一〇、五　貝塚
一三　どんたく　一〇、〇　神戸
一四　凡九郎　一〇、〇　大阪
一五　吸江　九、五　藤井寺
一六　千代香　八、〇　岡山
一七　あいき　八、〇　大阪
一八　古庵　八、〇　笠岡
一九　静泉　八、〇　神戸
二〇　芳子　八、〇　島根
二一　小路　八、〇　大阪
二二　牧人　八、〇　神戸
以下略

昭和四十九年度第十回
「**半生**」五句以内
締切　九月二十日

第十一回
「ひらめき」　五句以内
締切　十月二十日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三方　**大萬川柳係**

菜の花九月句会
（囲碁・将棋を楽しむ会）
○場所　北大阪囲碁将棋センター
吹田市泉町五丁目十一ノ十四
大矢　宅
阪急（元）千里山線豊津駅下車
市民病院の方向へ歩いて一、二分
○九月二十二日（日）正午開場・
三時締切　正午より囲碁・将棋
を楽んで、三時より句会、五時
より簡単な懇親宴。
○会費　五百円（懇親宴費を含む）
○兼題　囲碁・将棋・鰯雲・書く
○豪華賞品の予定

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼生々庵主幹は八月三日午後六時半から「日本医家芸術」誌による〝川柳における笑い〟の座談会に出席された。（原宿の南国酒家において）出席者には本誌おなじみの〝誹風柳多留二十五篇研究〟の鈴木黄氏、八木敬一氏のほかに石原勇次郎氏（三太郎門下）司会は椿八郎氏である。

▼本社創立10周年記念大会役員三十数氏が、七月十三日午後五時から心斎橋大成閣に集合、生々庵主幹からその労をねぎらわれた。

▼川柳きやりの主幹が磯部鈴波氏から野村圭佑氏に交代―社は〒115東京都北区赤羽西一の十二の四、神田仙之助方になった。（村田周魚氏逝去後満七年余）

▼四八年度（第十二回）国鉄川柳年度賞の第一位は―奇形魚の涙を海は知っている―ほか二篇・山崎敏氏。―選考委員として吉原紅月氏（本社同人）も参加。

▼川柳さっぽろ200号記念全国誌上川柳大会作品募集―作品締切は八月末日となっている。兼題―指図・鈴波選―蟹・風柳選―これから・鮮魚選―努力・砂人選―たくましい・風来子選―中途・月原宵明選（本社同人）―あこがれ・竜城選―放心・正夢選―そろう・閑人選―真顔・大雄選。あてさき〒065札幌市東区北二一条三丁目札幌川柳社内全国誌上川柳大会係。

▼第三回壽明賞作品募集―締切十月三十一日。詳細は〒862熊本市京塚本町五三―一二・七谷虹桟橋宛。

▼第二十三回東北川柳大会は10月6日午前10時から仙台市錦町宮城野婦人会館大ホールで開催。題―刻む・グラス・一喜一憂・中年・スパイ・噛みつく・際・変り種。投句料二百円、締切九月二十五日。宛先〒980仙台市東八番丁一七〇後藤方同会事務局。

▼川上三太郎先生七回忌墓参・11月16日―集合場所は東京駅八重洲北口。定員五十名、10月31日申込み締切―詳細は〒183府中市新町2の47の26、渡辺蓮夫宛

▼第一回にいがた川柳祭は9月16日10時から新潟市西堀通六の中央公民館五階大ホールで開催。題―「一」「開く」「味」「水・字読み込まず」「返り咲き」「炎」投句料三百円、締切9月10日―宛先〒九五〇新潟市鳥屋町二五一中野悠歩。

▼49年度文化祭川柳大会―第9回川柳文化賞贈呈式が11月3日午前11時から中央区新富1の16の8印刷会館で開催。第一部は出席者、第二部は投句者用―題―外見・カステラ・駆け引き・絡む・感覚・重ねる・肩代り・鐘―投句料四百円。締切10月21日―投句先―〒112東京都文京区千石3の35の3。白倉寿夫宛。（主催川柳人協会）

▼時の川柳七月号特集「楽しい句を考える」へ本社同人、浜野奇童氏、と西尾栞氏が執筆。

▼川柳平安八月号特集「思い出の句、思い出の人」で伊藤入仙氏は川柳塔十周年記念大会の入選四百数十句の中から「物価高天神さんの舟が出ず―久米奈良子」をあげておられる。

▼林蒼蛇楼氏（ハワイ）から―四十年の歴史を持つウイロー社も若い人の後継ぎがなく心配ですと。

▽句　集△

▼辰谷白村遺句集「しろがね」が〒630奈良市東寺林町三八市役所内、奈良番傘川柳会から発行。頒価五百円。

▽同人の動向△

▼西尾栞氏（八尾市）から―八月三日の理事会に出席予定のところ東京の義弟と藤井寺のいとこの急死にアメリカ出発が五日でテンヤワンヤでした。渡米はクラブの仕事で詳細次号に。

▼若木多久志氏（西宮市）は「けいさつの友」誌へ豆秋・弘朗・好一・軒太楼・みのる、葵水・庸佑・太茂津・独仙諸氏のユーモア川柳をとりあげて執筆。

▼尾緑之助氏（出雲市）は本社の大会後、お孫さんの死、ご長男（在東京）の大手術などでめまぐるしい日を送られたとのこと。

▼新岡回天子氏（唐津市）生々庵主幹は佐賀のご出身と聞きますが、当地はどうも振いませんが。なんとかならないものでしょうか。

▼古川鶴声氏（八尾市）の著書『人間模様』四百円はほとんど売切れた由。

▼河村日満氏（鳥取市）から―市監査、名誉市民詮衡委、会誌研究会などを迎え相変らず多忙ですと。

▼吉岡遁児氏（松江市）から―来年の路郎忌句会後、日本海の孤島隠岐を訪ね大阪の皆様と銷夏句会を計画中ですと。

▼三井酔夢さん（香川県）から―七月十八日からアメリカ女子学生を一人預かるホスト家庭をつとめることになりました。

▼岡崎詳月氏（松江市）は島根県川柳大会で席題「真面目」の選者として出席。軸吟―天職に励み雑事に耳貸さず―祥月。なお七月二十六日から三日間、京都、奈良方面へ旅行された。

▼村上春巳氏（泉大津市）から―奈良県川柳大会へ岩本雀踊子氏と森田カズエさんが出席されました。

▼竹中肖二氏（東大阪市）はお子さん達に古稀を祝われ七月二十日中之島グランドホテルで祝賀会をもたれた。―実感の湧かない古稀を祝われる―肖二。

▼久米奈良子さん（東大阪市）は第二六回毎日書道展

第二部に入選。―第二三回全関西美術展第五部（書）にも入選。それぞれ東京と大阪の美術館で展示された▼清水一保氏（鳥取県）から―第10回山陰川柳大会は九月八日か十五日に町中央公民館で開催しますと。―

▼よしながが川柳のうどん祭から―守口市の羽原静歩さんと鷺羽山にて。―梅雨はれて土産に欲しい島を撰る―久志良。七月二十四日、五日と久志良先生宅にとまりましたと羽原静歩氏。

▼菜の花・富柳会合同納涼句会（金剛山において）の寄せ書き拝受。栞、柳太、牧人、儀一、太茂津、いわを、百酒、鬼遊、美代、薫風、すみ子、酔々、岳人、小松園諸氏。

▼福田丁路氏（京都市）は七月二十六日から三日間、福島飯坂温泉―磐梯吾妻―会津若松東山温泉へ―会津よいとこ磐梯山がそびえ立ち―丁路。

▼宮西弥生さん（八尾市）は7月31日に欧米へ。

▼柳原静香さん（大阪市）の亡兄は今治の月原宵明氏主宰の〝汐風川柳社〟に属し柳原三太郎と号し、その弟さんも川柳家だった。静香さんは小出智子さん宅の隣家なので郷里である吉海町の吉海川柳会が主催する源氏忌に出席するため小出智子・河野君子・宮尾あいきさんらが友情出席され八月三日から五日まで旅を楽しまれた。（鶴声、静歩、両氏も出席）

▼月原宵明氏（今治市）から―吉海町の源氏忌川柳大会は大阪から六氏、当地から五人で川柳塔同人会の縮図のようでしたと寄せ書。

▼若柳潮花氏（高槻市）から―水客、紫香の三人で奥琵琶湖から賤ケ岳へリフトでした。始めてのことでハラハラしましたと。

▼笠原吸江氏（大阪市）から社用で北九州に来ていますと旅信。

▼山田季贅氏（大鉄病院入院中）病気の方は順調ですが検査、検査の日がつづいていますと。

▼堀江芳子さん（島根県）は七月初旬入院された。愛嬢ハツ子さんからのお便りだがご快癒を祈ります。

▼三宅不朽氏（竹原市）は七月二十三日、東広島市西条町寺塚、国立療養所広島病院十一病棟一号室へ入院された。ご退院の早かれと祈ります。

▼不二田一三夫氏七月の日曜読み切り小説（新関西新聞）は「うめき声」。短詩形文学界の心中実話。八月号を校了にして本が出来るまでの数日間を〝恋人〟のいる岡山へこそっと出かけ鷺羽山と弓削の路郎句碑だけを見て帰阪。句集準備から四か月ぶりの休日だった

▽九月の句会△

▼南海川柳会は―十九日六時から―題―違反・手さぐり・時刻表。会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会―二十日六時から―題―彩り・屑・勇気・主義。会場は松崎町三丁目、大萬。

▼川柳東大阪は二十八日午後六時から―題―太陽・野心・せっかち・パンチ。会場は東大阪市中央公民館2F第二集会室。

▼同人名簿作製について―前回名簿で違っていた個所や、その後の「柳界展望」で発表した分の訂正など至急お知らせください。

新同人紹介

河野幸子

今西寿子

竹内一世

稲葉星斗

宮本茂児
―好郎・瓢太・推薦

沢山三治
―太茂津・千寿子・推薦

食べすぎ・のみすぎに

新タケダ胃腸薬

効能＝食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3層錠…27錠・60錠・150錠　☆顆粒…16包・40包

タケダ

本社　八月句会

会場　以和貴荘
七日　午後六時

連日33度以上の暑さである。節電に便乗して？喫茶店あたり入ってもスグには涼しくならないのが多い。にもかかわらず六十六氏のご出席を得たことはありがたい。和歌山・奈良・兵庫からの常連に岡山から白岩文衛氏、土居耕花氏のご出席もあって、柳趣盛りあがる。

栞氏の渡米で、多久志氏に柳話をお願いした。氏一流の文字に関する話だけに聴き手は一言半句聞きもらさぬよう、なかにはノートする人もあった。

日本語は諸外国から輸入されたものが多く、とくに仏法からの「有象無象」や「往生」などの言葉が、日常われわれが使っている意味とは別のものであるとされ、二十枚ほどの紙に原語を墨書し、いちいち説明されていく。―重厚な柳話だった。

七月大会は月間賞を休ませていただいたが、八月の月間賞杯は葛城伊三郎氏が堂々掌中におさめられた。

（進行・**西田柳宏子**―記録・**高杉鬼遊**）

出席―庸佑・たかし・与呂志・多久志・右近・一歩・重人・天笑・文秋・柳志・花梢・百酒・敏・好一・滋雀・水客・古方・耕花・文衛・正彰・摩天郎・維久子・美幸・幸生・万作・冨江・静馬・冬二・鶴声・喜風・太茂津・鎮彦・一三夫・一舟・清人・凡九郎・喜美子・夕花・川狂子・誓二・十止庵・儀一・酔々・恒明・葛城・肖二・綾女・勝晴・千寿子・恭太・柳宏子・吸江・鬼遊・いわを・千万子・好郎・千梢・静歩・雀踊子・岳人・薫風・小松園・牧人・あいき・素郎・葉子。

席題「投　書」　定金　冬二選

投書に左右されたと思いたくなし　恒　明
投書する勇気は小さい夢を追い　与呂志
投書欄うっかり読めばはっとさせ　儀　一
投書してデン話で念を入れてくる　花　梢
投書とはいやだね猿のひとり言　幸　生
投　書　家　の　肩　書　錆　び　た　老　紳　士　川狂子
年配の投書に俺もと沸くファイト　正　彰
投書夫人やがて作家の夢を持ち　多久志
投書欄書きたい事が今日ものり　一　舟
溜る怒りの捨て場所がなく投書する　牧　人
見事な投書だ黙殺すると決め　重　人
一字ずつ投書ににじむ正義感　滋　雀
真すぐにあるいていても来る投書　岳　人
捨て石のつもり投書をくりかえす　花　梢
自虐にも似た文字綴って見た投書　凡九郎
世に怨み少々あって投書癖　恭　太
投書の名変えても夏の暑さかな　水　客
投書する事が多くてやめにする　耕　花
書いたり破ったり投書ゆれている　花　梢
投書欄右も左もうなずける　綾　女
一枚の投書が時限爆弾となる　重　人
総理様心に投書書いてみる　冨　江
美しい投書に山の男たち　岳　人
投書に女の心が鬼になる　雀踊子
一通は妻の名前で投書する　耕　花
投書の裏で女の嫉妬がもえている　夕　花
世の中のひずみで詰る投書箱　牧　人
大物になれば投書の字が見えぬ　鬼　遊
スクラップブックで褪せている投書　酔々
テレビ投書欄一つうれしい話きく　古　方
一枚の投書明日を狂わせる　美　幸
町の裏またしゃべり出す投書箱　維久子
投書の隅で黒猫爪を磨ぐ　雀踊子
魚屋のオッサンへとても明るい投書くる　美　幸
ママの書く投書琴線にふれるもの　静　歩
神様にお願いしている子の投書　冨　江
本名の投書言いたいことを言う　水　客
投書欄に光る女の遠い道　静　歩
投　書　を　運　ぶ　鶴　を　折　る　女　雀踊子
ニクソンへ投書を積んだ貨車が着く　美　幸
投書して花の匂いの中にいる　冬　二

席題「にぎり」　亀山　恭太選

金庫の鍵妻がにぎっている　平　和
弱点をにぎりチャンスを待つ微笑　滋　雀
太い方をにぎって銀行貸して呉れ　葛　城
鍵にぎる妻が専務で会社無事　正　彰
にぎり屋と言われた男家を建て　綾　女
吊皮をにぎる男の朝の詩　好　一
考えておくとはにぎりつぶす腹　静　馬

ひとにぎりほどに学園ゆれにゆれ　鬼遊
一にぎりの砂をおんなは武器にする　冬二
にぎり拳へ男は何をしまい込む　凡九郎
恥しさ口惜しさ一緒ににぎりしめ　柳宏子
にぎったら蓄めとく籤がまた外れ　百酒
にぎらされたらしいと離反噂され　百酒
心とは別に妥協の手をにぎり　冨江
にぎり返された温く味をにぎりしめ　柳志
ホステスは指輪無い方にぎらせる　千寿子
そろばんを弾いた上で手をにぎり　好一
口惜しさをぬぐう涙は掌をにぎり　鬼遊
脳天へワサビがぬけるにぎりずし　雀踊子
浮気者にワサビがきいたにぎり寿司　吸江
千円のにぎり食べたを自慢する　一三夫
つり銭を出したその手でにぎる寿司　吸江
見習いのまだにぎれずにあがり酌む　酔々
客筋を見抜くにぎりの手が動き　滋雀
江戸前のにぎり遠洋産の味　十止庵
女連れ時価のにぎりへさりげない　重人
トップレディが少し酔うてるにぎり寿司　酔々
喋らない親父がにぎるうまい鮨　美幸
ほっぺたにめし粒つけてにぎりめし　花梢
母の味には遠いおにぎり母の忌や　水客
ドシャ降りになりおにぎりの昼にする　多久志
カニさんがほしがる子供のにぎりめし　雀踊子
珍客へにぎりを出してほめられる　いわを
おにぎりにすれば焦げめし喜ばれ　百酒
おにぎりの不揃い母はもういない　一歩
遠足のついでの昼のにぎりめし　重人
おにぎりはいつも三角決めている　いわを
山ゆかば山の味するにぎり飯　万作
にぎりすしきれいな愛のまま別れ　冬二
念願がかなった土地がひとにぎり　恭太

席題「岩風呂」　白岩　文衛選

岩風呂のこんな処に非常口　好一
岩風呂も作り宿坊ようはやり　好郎
岩風呂も回転風呂もあるホテル　冨江
まんまるい月に岩風呂酔うている　岳人
男湯だけが岩風呂だった宿　好郎
岩風呂で効能書も読んで来る　庸佑
岩風呂に傷心枯葉沈まない　岳人
岩風呂で混浴派手な声を立て　綾女
団体で入る岩風呂の味気なく　好郎
岩風呂で絵はがきの句を考える　恭太
岩風呂の湯気に北斗がかすんでる　千寿子
岩風呂へ明日の命を信んじとく　雀踊子
岩風呂の真上に夏の雲が湧く　誓二
岩風呂に一人でつかるあほらしさ　幸生
岩風呂に父の仮面がおいてある　冬二
岩風呂があほらしくなるハネムーン　重人
傷心の旅へ岩風呂熱つすぎる　岳人
岩風呂に人のいるらしちろやむ　喜美子
岩風呂の団体客に歳が無い　万作
岩風呂のしじまに謀反考がえる　雀踊子
岩風呂を下りるもう一人のわたし　冬二
岩風呂に先客がいる女下駄　牧人
石ころ二つ三つ四つぐらいで岩風呂か　古方
岩風呂の仕切りへ月が二つ浮き　百酒
岩風呂で同病同士馬が合い　儀一
岩風呂へきつね女になって入り　鬼遊
岩風呂でうっかりひとり言きかれ　十止庵
名物は岩風呂だけのランプの灯　十止庵
岩風呂にピッタリと来た無性髭　耕花
痩身の骨身にささる岩の風呂　好一
岩風呂で妻と話の何もなし　文衛

兼題「惰性」　高杉　鬼遊選

給料を惰性で運び蟻に似る　茶人
上司から順に惰性で叱られる　久子
同感の贈答廃止にふみきれず　静馬
老夫婦の方が惰性の顔でなし　あいき
惰性また退職金を弾いてる　素郎
和尚さん惰性でお経抜き忘れ　一舟
もうやめた筈が見ている株式欄　静馬
髪を梳く惰性の中にある炎　夕花
疲れ切る独楽は惰性でなお回り　小松園
お互いに家裁を意識して夫婦　多久志
起きて寝て食うて惰性の息をする　肖二
なんとなく出勤なんとなく印をおし　静歩
惰性だけで生きて妻です夫です　幸生
登山靴履けばひとりで山へ向く　岳人
交通禍ああ今日もかと聞き流し　吸江
温室の惰性香もなく売り急ぐ　素郎
なるようになるやろ朝の靴すべり　重人
赤字でもへそくりだけは忘れない　静馬
惰性では済まぬ女は七カ月　与呂志
捨て切れぬ夢をいだいている惰性　冨江
下積みの先にお辞儀をする惰性　百酒
ガラス箱の植輪を惰性だというか　冬二
中年の惰性で月給を運ぶ　牧人
くされ縁たたけば惰性の音がする　冨江
惰性とはおそろし老夫が茶を入れる　喜美子

夕焼けへ雲の惰性を見ていたり　水客
おりの中パンダも惰性の眼と変わる　清人
ばら色の惰性ベビーにじゃまされる　千梢
人の世の惰性の中に四季があり　登美也
ああ惰性七時五十分の汽車を待つ　美幸
きのうも夫婦ぎょうも夫婦でめしをくう　冬二
十二時を打つから今日も昼にする　鬼遊

兼題「余　技」　　児島与呂志選

ピアノひく余技に近所の目が白い　久子
余技豊富家をつぶした過去を持ち　章雅
実直な噂さの人の余技が冴え　軒太楼
余技ですとくろうと跣足年季あり　藤持
余技有って人生楽しいものにする　清女
余技の絵をお世辞で褒めて貰わされ　牧人
日曜を隣の棚も釣らせられ　耕花
味気ない暮しを余技に支えられ　好一
折角の余技を外孫来て荒し　千万子
石女の市松人形つくる余技　酔々
余技を持つライバル大きな影に見え　幸生
余技の名で速達まいごになっていた　夕花
恵まれぬ子を援けあう余技の筆　鬼遊
気まぐれな余技はあれこれかじるだけ　花梢
余技でも食える女ですきがある　雀踊子
日曜の部屋を彩どる画布の花　鬼遊
余技話すときは素顔になっている　水客
弁当を添えて切符を呉れた余技　凡九郎
金かけた割に社長の余技冴えず　十止庵
日々好日ベテランとしての余技　花梢
お師匠はんとこへちょこちょこ社を抜けて　素郎
定年の宴で余技だけ惜しまれる　美幸

一分間の柳論

島居百酒

伝統、前衛、二派に別れて、前衛派の特異な句風に対し、伝統派の間でも論議を醸している。だが作者が川柳と標榜している以上、川柳を愛する同志には違いない。それで選者によっては、難語の配列の中に何か蘊蓄のある思想が潜んでいるのだろう、位で明解の出来ないままにこれを取上げる場合があるかも知れない。それを先走りの初心者が革新的と感違いして、言葉の遊戯的亜流に陥らないだろうか。これをこそ警戒し問題にしなければならない。

川柳には川柳の本質がある筈。発表するからには自己陶酔の独善から、他人の鑑賞を寄せつけない態度では意味がない。時代の推移と共に生活様式もモラルも変化していく。その中から人心の機微を把握して詠んだものが、抵抗なく万人を感動さしてこそ命ある句であり、作句する者の歓びではないだろうか。

伝統、前衛、互に切磋琢磨してこそ進展がある。人間陶冶を座右銘とする者として、徒らに排他的であってはならないと思う。

余技として山の歩巾を持つ男　岳人
余技いつか余技ですませぬものになり　柳宏子
余技ひとつ無く日曜の蠅を追う　耕花
余技なればこそ拙い芸もほめてくれ　誓二
余技だ余技だと裸のおんなばかり描く　冬二
余技の腕老いず紙面に躍る文字　右近
余技もない働き蜂で悔いがない　滋雀
人間の丸さに余技と言う余裕　凡九郎
余技展でプロも驚く値をつける　一三夫
こんな余技持ってたんかと見直され　滋雀
とっときの余技とっときの時に描し　千梢
神様の余技かも夫婦いがみ合い　美幸
余技多彩されど生活の糧ならず　鬼遊
ばら園が余技平凡ないい夫婦　与呂志

兼題「寺」　　本多　柳志選

寄付の額順にならべて寺普請　葛城
寺で見る娘がみんな美しい　文衛
音も無く尼僧は過去を抱いて住み　どんたく
人生にもう欲のない寺詣り　牧人
あじさいの寺と覚えて名を忘れ　文秋
山門を開いて末世の寺が生き　宗義
恩給をあきらめ教師寺を継ぎ　恭太
裏切ったおんなにもある寺の風　冬二
拝観料合掌しない客ばかり　恭太
金のない旅の一夜が寺で明け　茶人
孫と来たお寺まいりは手間がとれ　季賛
成功を国のお寺に感づかれ　耕花
お寺にも経営学が生きていた　多久志
ダムになる寺へ無常の蟬時雨　百酒
借景の美事さ寺は又こばむ　水客
ありがたく疲れて戻る寺めぐり　登美也
安らぎは線香にある寺まいり　柳信
極楽へ行けるつもりか寺参り　万作
赤い灯のホテル寺の裏に建ち　冨江
壇家逃げそうで寺にも駐車場　冨江

善人になってお寺の門を出る　清女
寺詣りもするが時にはストリップ　小松園
寺の持つ歴史を笑う鬼瓦　雀踊子
寺々の鐘が重なる高野山　小松園
直木賞以後はお寺に身が入らず　静馬
京都からお経の上手い子が戻り　柳志

兼題「動く」　正本　水客選

鳴物の派手さに動き察知され　軒太楼
あてのある時のこどもはよく動き　失名
でんでん虫何思い出したか動き出し　季賛
月動く俺のタイトルついてくる　祥月
スト中止動き始めた人の波　庸佑
街中が動きはじめた朝の音　夕花
動く間は放っとくと言う手を打たれ　耕花
動いてるアワビ値切らず市場篭　花梢
動くものあって乱れた蟻の列　肖二
流し目に動かされてる不甲斐なさ　太茂津
梅雨前線動き少年あかるくなる　酔々
雲動く西布に浮んだリアリズム　滋雀
動くもの動かし玩具買わず去に　好郎
弁解を見抜いて心動かさず　千寿子
政治家の動きに合せた金の音　幸生
動揺を恐れ総理も自我を折る　喜風
よく動くので婿養子かと問われ　右近
目の動きここは腹芸見せるとこ　庸佑
動くむし園動かしてたら陽がかげる　古方
北浜の動き忙しい電話ベル　冨江
人を待つ月はあんなに動くもの　千万子
動いてるうちは会長やめさせず　文秋
巣を張りつめたから蜘蛛動かない　好郎
皮切らし骨切る構え動かれず　一舟
張り込みの刑事にホシが動かない　重人
よく動く兵隊持っている強味　恭太
花の香が動いて風の出たを知る　一三夫
風邪を押す妻の動きにさからわず　静馬
小刻みに動く人妻の酔さめる　太茂津
おえら方動いてトラブルこじらせる　静馬
ブランコがすこし動いて人がいる　冬二
自転する地球で動くまいとする　凡九郎
その動きピエロに見える日もあって　清人
屁理屈をこねてちっとも動かない　葛城
あふれ湯に旅情の動く音を聞く　水客

（河井庸佑整理）

▼前号出席芳名について。一部洩れていましたので追加しておわびいたします。

8月号つづき―辰男・伸吉・静馬・〆女・茶仏・水客・正彰・柳志・阿茶・太茂津・庄作・以兆・川狂子・天笑・勢火・あいき・儀一・静香・十止庵諸氏。

▼前号―生きるのが精一杯の無精者―は、**川狂子**と訂正します。

▼前号訂正―P9下段14行目は石川伽流洞。

▼第3回小松川柳大会は9月29日（日）10時から、小松市小馬出町「小松市公会堂」で開催。宿題は「痩身・比呂夢選」―「嫉妬・冬青選」―「飲む・明二選」―「原則・喜見城選」―「日本語・**若本多久志選**」―「付添い・芳川選」―「お人好し・**伊藤茶仏選**」各2句。投句は受け付けません。連絡先〒923小松市本町一丁目一〇　吉田秀哉宛。

雅号ぶっちゃけばなし（130）

いすい　おち

水一智越

もう、ふた昔あまり前のこと、不朽洞に、路郎先生を二度目に訪問したさい、雅号をお願いしたところ、『雅号などと言うものは自分がつけるのがいちばんよい、人につけてもらった雅号はあきが来よい』と言われたことがあります。それ以来あまり雅号のことについて気を使ったことはありません。本名である『かずみ』をそのまま『いすい』として使用しております。ここ三十年間、職場でも本名で呼んでくれる人はなく、みんな『いすい、いすい』と言ってくれます。要は、いのちある句を作ることだと思っております。

国家公務員（郵政）（四十五歳）

花地抄壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳たけはら　森井　菁居報

倖せをつかんだ如く咲く子花　静水
その話されると不覚にも涙　房子
完敗のそれでも太陽は昇るのさ　蘭幸
山なりに闇夜が息をする蛍　不朽
生きている地球と思う阿蘇に立ち　政己
せせらぎに話せば心水に溶け　紫光
茶目っ気な二女家中をかき廻し　千百合
聞く程にたあいないのが子のけんか　そのみ
らくださんこぶの中にはなにがある　愛
掘りおこす想い出があり耐えている　青居
長靴の重さへ雨の詩が跳ね　鬼焼
母の声老いても老いても母の声　のばら
花びらを一つ残している未練　一路
肉買った日の換気扇よく廻り　貞子
街一歩出ていささかを旅愁めき　英詩
ささやかなおごり我家のバスクリン　かつ子
嫁いでも姉は姉だと言うてくれ　酉合
病んで知る何かプラスになっていた　季賛
集金が私の愚痴を聞いてくれ　スミ子
母だけは僕を大人と見てくれず　扇水
口笛を吹いてパスの子が帰り　文晴

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

文部省よりも強気な日教祖　文川
大阪弁強く言っても間のびして　孝夫
失敗の数だけ強気の角がとれ　上田
どん底に落ちて強気で生きてゆく　亜成
ある筋の情報一転して強気　一扇
約束を守る楽しさむつかしさ　健坊
お父さん約束守れと子に言われ　西岡
待ってます貴方と約束した日まで　酒井
疑いも晴れて二人はゴールイン　健坊
河童伝もう聞けません今の川　鮟
公害で河童の皿も泣いている　中野
河童ふと頭の皿が気にかかり　聖地
上等の釣具を話す河童の子　有一
強気にもなれず定年過ぎてゆき　千夢
約束の時間に来たは集金人　常夢
公約は政治の嘘と辞書に載り　栄
疑いを知らぬ子の目に嘘つけず　博泉
デイトする河童へ夏の夜が明ける　形水
真黒に焼けた河童がボスらしい　弥生
河童進軍川の流れを止める数　入仙
頭の皿みがいて河童逢いにゆき　好郎

川柳たましま　稲田　豊作報

よせばよい話へ風の音を聞き　千翁
紐手繰り寄せれば妻が握ってる　三辛堂
六法の端を噛ってから落ち目　梁水
泣く笑う不惑の坂の一歩かな　八笑人
花嫁の誓う言葉が刷ってある　林鶴
やわらかい声で背から斬ってくる　澄子
ともすれば沈む心と勝負する　皷草
他人様の情にすがる手がきれい　朝二
灯に落ちて女乱れる風が乱れる　成行
きれいごと並べて他人をさらけ出し　慶子
クーラーを買えとわが家の扇風機　安静
やわらかい手が重なってから悩み　三林坊
夢食べすぎて獏の夢が醒めぬ　豊作
やわらかな言葉にもある裏表　武子
母の日に父がほんのり酔うてくる　秀子
飲み足らぬ男が酒を酌ぎ廻り　大笑

川柳東大阪　竹中　肖二報

おみくじの吉も受験の子に持たせ　思月
一期落ち二期落ち予備校だけ通り　弘生
子の受験テレビの声を低くする　肖二
文珠の智恵さえも借りたい日の受験　雀踊子
真実がどこかで泣いているカット　重人
カットしても子供は知っているシーン　十止庵
恋さらば未練の髪をカットする　鬼遊
母ちゃんの意見結局カットされ　季賛
生返事あとで達者な口をきく　古方
ポケットの財布が軽い生返事　牧人
この儘で袂れる人へ生返事　小松園
生返事うぶな娘とかいかぶり　あいき
お説教心の手入れして帰る　喜風
倦怠期下着も手入れしてくれず　儀一
大手入れ今日は婦警も狩り出され　好一
夕陽背に農夫あしたへ鍬洗う　美幸
尼寺の仏典の手入れゆきとどき　一栄
盆栽の手入れに賭けたひとりごと　柳信
黒つまんでる方が優勢な盤の上　誓二
おつまみも持参の友と酌み明かす　酔々
鼻つまみの人にもあった良い噂　綾女

生いたちの噂をされている気品　文秋
気位の高さを気品と思てはる　凡九郎

菜の花句会　大路美幸報

油断ない女の貌が乾いてる　美代
海岸を駈ける二人は番蝶　栞
一本の杉が見ていた血の歴史　美幸
山脈を電波がこえてニューモード　十止庵
一対一になって女が訊きたい眼　小松園
この人に盗んで欲しい油断見せ　百酒
九官鳥もとの主人は日本人　夕花
十月の海岸サンダル一つ置き　幸生
献血のあとは土筆の土手に寝る　酔々
山脈を見下す心澄んでくる　弥生
紅バラのトゲに撃たれし失語症　鬼遊
美しい日本語康成の文に生き　綾女
海岸のパラソル未来を語り合い　重人
あの山脈の向うに老いた母在わし　誓二
主婦連のお訊ねしますに追い込まれ　鶴声
訊ね人恋は咲かないまま終る　凡九郎
そそり立つ山脈人を寄せつけず　肖二
献血の友健康に横たわり　鎮彦
血のきずな一と眼で確とめぐり合う　頂留子
油断ない人へスリの瞳が迷い　儀一

川柳大阪　児島与呂志報

一人旅豆の花咲く駅で降り　胡蝶
マイクまで歌に合わせて踊らせる　敏
順番のマイクへ小便近うなり　秀峰
辻つまが合わず苦しい嘘をつき　道子
苦しみの過去を包んだままで逝き　笑風
熱中が出来る若さがほしい歳　呑歩利
ピンボケがうすく旅での二人仲　至峰
熱中する事の出来る幸福さ　京介
煮つめたら苦しむ材料これだった　徹舟
人生の苦しみ皺が語って居　徳松
釣り糸をたれて庶民の背もまるし　凡々
苦しんだ成果が鯛となる受験　重人
名竿に申し訳ないビクの中　本蔭棒
揉めごとの渦中で醜い裏を知り　誓二
初孫の声に初老をうろたえる　洛酔
悪い夢さめて故郷へ筆をとり　天智
許されぬ恋なりせめて夢でなと　太峰
下積みの苦しみ未来の夢で耐え　晃山
苦しみを二分の一で来た夫婦　与呂志

駒つなぎ川柳会（大阪市）岸南柳報

じわじわとつめ寄って来る京都弁　すみ子
どことなく善意のにおう瞳のぬくみ　儀一
サングラス善意の席で反り返り　石拾
小さくても善意大きな感動呼び　信義
あきらめた筈をやっぱりむし返し　柳信
蒸し返すつもりはないとむし返し　多津緒
むし返しに来たとは見えず淑やかさ　宏子
帯キリリしめて女のむし返し　美代
むし返すつもりないので聞き流す　南柳
むし返し返し嫁入り饅じゅうやっと食べ　規一朗
蒸し返す議論にあくびかみころし　はやを
顔いろをのぞきながらにむし返す　花梢
じわじわと後でこたえる京訛り　小松園

ハワイウイロー社　林蒼蛇楼報

仲人の顔で披露が派手になり　雪女
双方をべた褒めにしてまとめ上げ　草海
仲人は嘘もちょっぴりそえてほめ　エス子
仲人の嘘でそこにも又悲劇　暁舟
つわりらし母仲人へ掌をあわせ　蒼蛇楼
仲人は喧嘩のろけも聞いてやり　一つ葉
お見合へ仲人中座の粋きかせ　風影
仲人の話しへ母が先ず折れる　三石
出来て居る二人へ仲人邪魔になり　万里歩
姥桜仲人口にしがみつき　カロ女
正直がすぎて話がまとまらず　翠峯
仲人は座る所にすわらされ　峯円
仲人口で初めて知った賢夫人　十吉
ほめちぎる仲人口に不安湧き　北海
だまされた仲人口でこの不遇　小雪
嘘七分まこと三分の仲人口　快夢起
世の移り仲人も要らぬ自由主義　河舟
仲人もウエデングマーチで荷を下ろし　稠雄
仲人はつんぼさじきで苦笑い　椰子郎
仲人はいいとこ一つを褒めちぎり　公女
仲人に凱歌上って笑い顔　拝山

佳句地10選（前月号から）

大矢十郎選

つまずいて大きな穴に気付かされ　千百合
目の黒い内にでかした子よ嫁よ　静水
一つずつ買うてセットにして持たせ　思月
友情をかざして友情に遠く居り　百酒
うれしさをこらえ婦人科の門を出る　マサ子
友情に妻は裏から走る酒　政夫
荷飾りを見て来た妻のよく喋り　小路
居眠りを生徒に聞くと母が病み　芽十
血を分けた事が争う元となり　淳子
悪人でありようが無い声である　幸生

川柳わかやま　野村太茂津報

汗ふいたハンカチ欲がるほどのぼせ　弘生
熱中したほど上らぬ腕をなで　与史
仕事にも恋にも熱中出来ぬ人　マサ子
夕映えて国境もなし渡り鳥　正治
あすがある夕映えの彩なぐさめる　武雄
正論の孤独に耐えている男　俊
くされ縁互に逆らいながら生き　富江
特訓に耐え栄冠の日に備え　白光子
玉葱に今日の倖せ目にしみる　芳童
混浴の刺激が強い旅の宿　福水
強過ぎる刺激へそっと出す冷茶　きみ
刺激があるから効きそうに思わせる　凡九郎
ほどほどの刺激が不老の薬となり　としよ
刺激がほしくて導火線を抱く　雀踊子
逆らえばみな革新という政治　春亭
損得を抜いた逆らいつっぱしる　里美
衣食足り耐えられぬ子に育て上げ　八千代
暴言に耐える心の美しさ　祥月
時折はギブスに添寝してやるの　英子
はったりの布石相手の視線追う　太茂津

川柳ささやま　河原みのる報

顔ぶれをじらして主賓やっと着き　とんぼ
運命の神が仕組んだ後もどり　可住
本家継いで浮世の義理という重荷　青峰
乳房よ未婚の母となる重荷　越山
脳薄し腕は自慢の冴えを見せ　まさ子
迎合はせぬ信条が平でおり　近江
女の児母の個性を着て歩き　ヤン坊
個性の差が隙埋め合ってよい夫婦　禾帆
風当り先ずはノッポを叱っとき　みのる
風あたりかばってくれた方へ向き　とおる
あの時のそれからという風当り　無鬼
姑の智恵風鈴の風となる肌ざわり　百合子
風あたり受けて立つ気の大欅　素水
風あたり妓は三味で唄に換え　白猫児
風たり強い間が花だった　宗珠
内職の手がインフレにじっと耐え　秀峰
十円を値切る女の指光る　与志

京都塔の会　松川杜的報

湯の町で相合傘の廻り道　和友
浅草にお江戸を残す酉の市　王石
こんなとき詩人の髭が痒くなる　水客
突然の訃報に過去の悔つのり　笛珠
突然の無礼をわびる筆達者　三求
傘持って出ると荷物になる不思議　誠史
公害に花鳥風月弱かった　喜信
突然にしては用意が行き届き　飛鳥
突然の指名ともかく立ち上り　蘇堂
夫婦独楽やぶれ太鼓を今日も打つ　明代
素うどんのうまさ割箸がチンバでも　季賛
巣へ帰る鳥へ落日待ってやり　求芽
公害の空へは飛ばぬ竹トンボ　杜的

どんぐり川柳会（大阪市）谷垣史好報

山盛りの菓子へ素直な手が伸びる　鬼遊
その中におざなりもいる多数決　美幸
おざなりと知らず就職当てにする　奈々
中二階半端な風が通り抜け　岳人
盛り上げる応援団も雨に濡れ　いわを
おざなりに撫でれば猫にひっかかれ　酔々
おざなりの工事がバレて梅雨明ける　一歩
盛塩の風情はむかし宗右衛門町　好郎
おざなりの好きな女でまだ独り　つき子
学歴の差別半端な職につき　修史
お喋りに心の半端見抜かれる　喜風
二次会に来てからゆっくり飲み直し　サヨ
皿に盛る料理も活きてプロの腕　万里
ほどほどに負ける半端の値札つけ　之保
四面楚歌中途半端で筆を折り　小松園
原色の皿に饒舌盛る女　史好

南大阪川柳会　金井文秋報

世相どう変りゆくとも円い月　好郎

第26回大阪文化祭川柳大会

日時　11月10日（日）10時開場―1時締切
・開会
会場　中央公会堂（3階小集会室）
講演　「日本経済の裏表」
関西学院大学教授　橋本徹氏
兼題　「勤労」　久保田以兆選
「上方芸能雑詠」　堀口塊人選
「生きる」　川村好郎選
「近頃の社会記事から」　松谷政俊選
田中桂太楼選
前田芙巳代選
席題　「リボン」
出句　「樹」
（当日4題発表）
各題2句以内（締切1時）出句は出席者に限ります。
賞　席・兼題とも秀句に、府知事、大阪市長、府市教育委員長から川柳賞。
選者から「選者賞」を贈呈します。
句集　入選句集は三〇〇円。当日申込受付
主催、大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

無責任という気楽にもなる世相　古方
赤ん坊に楢山がある世のかげり　牧人
幸せは世相に染まぬ嫁と居る　あいき
うやむやうやむや人間なんてナマズ　凡九郎
うやむやのうちに会計入れ替り　文秋
うやむやにする公約だから聞き流し　君子
くもの巣にかかった発起人の地位　正彰
発起人白髪頭も一人入れ　柳宏子
飲む時に数多過ぎる発起人　一舟
いい事だけを聞く耳でありたい老後　恒明
何事も善意に聞いとく母の耳　智子
鍵っ子が瞼に母の虹を画く　肖二
児の夢は王子になって虹渡る　鶴声
色の順かまわず園児虹を画き　一栄

脱人間心の虹が消えてゆく　悦郎
郷愁の想いが駈ける虹の橋　好一
パトロール早くも春を知るベンチ　静香
パトロール村は平和なペタル踏む　滋雀
パトロール迷子見つけてから困り　綾女

城北明朗句会　川口弘生報

頬っぺたが真赤で母の血が流れ　春巣
褒め言葉に困る社長の歌を聞く　牧人
保護司の願いうちの子もひとの子も　三十四
ぎこちない妻ホステスのホームバー　誓二
ほれこんだ仕事に生きて歳とらず　満津子
渋滞を哀れと思う歩道橋　智子
ありたけの炎燃やしてゴールイン　繁子
補聴器に頼り寛美にかぶりつき　小路

ポンカンの一房残し思慕の朝　静歩
反省のほしい男のヘルメット　ますえ
降るような星故郷は過疎の町　鉄児
本筋やと骨董屋にすすめられ　弘生
豊作が価格操作の邪魔になり　百酒
苦吟するロダンの如く頬を突き　喜洸
大法螺を吹きつつ妻子に苦労さす　生仏
豊作をそっと取りまく貧乏神　濁水
マニキュアあの手で料理作るのか　つね
恋しさに今年も三度通り抜け　秀村
後咲きの桜の下で手をなでる　駒子

南海電鉄川柳会（大阪市）辻圭水報

部下のミス傍系会社の椅子が待つ　清女
傍系へまだ人生をためしてみ　宏子
傍系の黒字本家を救うなり　圭水
傍系の故郷を捨てて出た出世　季賛
傍系は空気のおいしい片田舎　和郎
上役が横すべりする傍系社　柳信
傍系の提携に他社デマ飛ばし　儀一

和歌山七面句会　三幸報

おのろけも聞いて相づちサービス業　知也
出戻りの姉が話の腰を折る　其夕
弁当を開けば舞台も食事時　ふく代
男とは惚気以上にする浮気　勇次
惚気にも年期をふめば古典めき　光治
美容院のうけも愚知も聞く鏡　富子
本家にてまだ足腰を延せない　三幸
ラーメン屋出前ついでに見る舞台　政夫
舞台装置だけを褒めてる酷な客　マサ子
狂女退く舞台へ吐息殺しいて　和美
桧舞台汚しに行くと言わぬ嘘　保雄

雅号ぶっちゃけばなし (131)

すろう

やまもと

山本素郎

一会社員。本名一是之。
かぞえ四十五歳。

昭和二十六年――秋。所用の行きずりに某病院で北川春巣先生の川柳講義を聞かせてもらったのがきっかけで川柳雑誌に親しむ。

昭和三十四年の春。はじめて天丶の号で作句。川村好郎先生にたしなめられ巣郎と名乗って本社句会にのぞんだが一句しか抜けなかった。その唯一無二の句主名が翌月の川雑では素郎に変っていたのである。春巣先生の一字を無断で使ったおこがましさを、だまって誤植で誡められ救われもして今日に至る。

蛇足ながら（郎）は好郎先生にお許し頂いたもの――。路郎先生からは『いくらか出すのならボクの（郎）にしといても良えのやで』とわらってはげまされた由緒のものである。

・ペンペン草・

★薫風さんの企画で〝句集について〟を特集した。好啓・冬二両氏には薫風さんからお願いした。

★句集の〝ぶっちゃけ話〟を二つ三つ。表紙のシンボールマークの塔を形どる川の字の線が細すぎ、印刷すると金ベタの丸になってしまった。そこで特殊な凸版に作りかえ、川の字を浮き上がらせたのである。これは印刷所の協力があってのことである。秒読みになってから、たったこれだけで納品が二日間おくれた。

★序文の前後に紙質の異なったページをはさめば、少しは落ちついたものになったのだが、予算の関係であきらめた。それともうひとつ、有名物故作家の何氏かを入れたかったが、これも見送らざるを得なかった。

★製本の断裁で原稿より5ミリほど下部が広くなっていた。ショックだった。

★皆様からいただいたお〜

本社川柳忌句会

日時　九月六日（金）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
　　阿倍野区松崎町二丁目
　　電話622・1275番

（今月の出題・板尾岳人）

兼題
アメリカ土産話　西尾栞
「飽きる」　金井文秋　選
「魔法」　西田柳宏子　選
「心酔」　戸田古方　選
「波」　若本多久志　選

席題　三題　当日発表
会費　二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社

11月の兼題　「信心」「貫録」　「天井」「激突」

募集

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵　選
水煙抄（10句）川村好郎　選

課題吟（各題5句以内）
「暦（こよみ）」　大矢十郎　選
「はたらく」　岩田ひさお　選
「ハンター」　中筋三幸　選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵　選
水煙抄（10句）川村好郎　選

課題吟（各題5句以内）
「冬山」　板尾岳人　選
「除夜の鐘」　村上春巳　選
「人権」　中村ゆきを　選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳笑をご使用ください。

10月6日は二賞発表句会

定価　二百五十円（送料十六円）
半年分　千五百五十円（送料共）
一年分　三千円（送料共）
昭和四十九年八月二十五日印刷
昭和四十九年九月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　藤原童心社
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・一七一一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

言葉やお便りをスペースのあるかぎり到着順に列記させていただこう。

★**宮尾あいきさん**—子どもたちにも一冊ずつ母の記念として分けるため12冊いただきます

★**藤井一二三氏**—発行当夜すぐ私の句のページを開けて、亡き父母の仏壇に供えました。それから私達夫婦の仲人さんやお世話になっている方々へお届けしたので七冊お願いします。

★**藤岡花梢さん**—六冊申し込んだのに足りずあと二冊追加します。

葉子コーナー

▼子供の頃、七、八人で空知川へ一泊のキャンプをしました

▼食糧や毛布などは持ち寄りです。石を積みストーブを作り川で鰍などをとって焼いて食べました。

▼北海道の思い出は楽しいものです。

★**天正千梢さん**—表紙のバッジも効果的で、それに表紙の色と見返しの色との調和が見事の一語につきます。さっそく飛んで行ってお礼を申しあげたいのですが息子が盲腸で入院していますので、失礼ですがお好きなせんべいでも召し上がってお疲れをとってください。（金一封拝受）

★**河村日満氏**—句集川柳塔の見事さ、本当にありがとうございました。

★**林野甦光氏**—病院へ英詩さんが届けてくれました。流石、立派な句が揃い、感謝がいっぱいです。

★**三井酔夢さん**—句集が好評で友人にとられてしまいました。残部がありましたら二冊追加ねがいます。

★**工藤甲吉氏**—立派な出来ばえ、その衝に当たった各位に敬意を表します。

★**東野大八氏**—立派な布張りの豪冊ぶりに愕きました。下部の広いのはページをくるのに数字がよく見えて大変便利です。（皮肉ではなく卒直な感想です）

★**岡田甫氏**—巻末の同人リスト、さすがに麻生路郎先生の遺された雑誌だけに堂々たるものです。——意外にも新鮮な佳句が多い。

★**富士野鞍馬氏**—立派な句集、この企画よろし。皆さんの玉吟を社会に推示するのに格好な本です。

★**小出智子さん**—子どもに一冊ずつと他からも頼まれ、五冊追加ねがいます。

★**垂井千寿子さん**—葵水の句、よい句をえらんでいただきました。十冊お願いします。

★**月原胃明氏**—期日に刊行、立派な出来ばえです。ずっしり重い530ページは圧巻。

★ここでスペースがなくなりました。

★句集の宣伝をよろしくお願いいたします。

（不二田一三夫）

残暑お見舞い申しあげます

季節料理・折詰

大亀

大阪市阿倍野区松崎町

TEL（623）5031・5032

南区畳屋町三ツ寺センター

TEL（211）9184

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十九年八月二十五日 印刷
昭和四十九年九月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五六八号
川柳塔 九月号
定価 二百五十円（送料十六円）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

国際観光旅館

魚又楼（うおまたろ）

風光明媚な海岸美を誇る

TEL 和歌山 (44)0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4